新撰
季寄

俳諧獨あるき

何心庵永樵撰

全

新撰

季寄

俳諧獨あるき

何心庵永樹宗匠撰

目録

四時の部 季寄の
歌句仕立ゆうのこと
句読句評のこと
古歌八切字のこと
歌七移のこと
附句のこと
腸断三冊目録
月花のこと

意の句こと
去嫌さ〳〵こと
千句のこと
其外式の部
雑中こと
雑芽習のこと
俗芽語扱のこと
季吟の説
歌月こと事

俳諧の力ちまち軍此集より
ふこの入もの四と六元祖の捷な
ちまちまち独歩を用ゐる
上をいふれる撰者心加言を
入ること何〳〵と看之

四時こと次普元
七世こと自筆こと何心庵永樹

山路を踏分て　江戸
[illegible]　四谷の大木戸
[illegible]
[illegible]
[illegible]

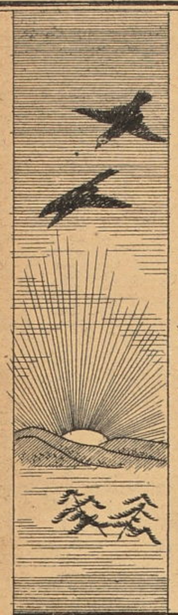
頭書新選季寄

一月 季冬

太郎月 初月 律 大呂 小寒

大寒 元日 一日

開化以来元日の褪ナシされと一日と神ニテハ雪季ノ歳且ノ意ヲ加ふるなり

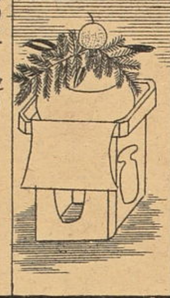


元三 元朝 三朝 三始 三元履端

四方拜 一日寅一刻主上出御清涼殿ノ東庭ニ拜四方天地及ヒ山陵ニ年災ヲ拂ヒ宝祚ノ齢ヲ祈給ふなり

齒固 もちひゝ花 大根ひもちふ 続もち ゆゝり葉ふ

裏白 旨煮 切やこ茸



御薬を供せ 屠蘇 白散

天皇ヒさをヨこ〜めさう先薬ヲとて小女をさゝひてのましめさてたてまつるなり

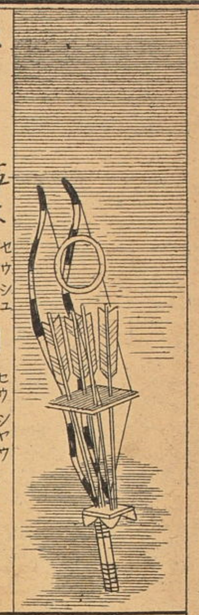
明治新選俳諧獨歩行

其角堂永機輯

桃支庵指直校

發句仕立様ノ事

其角曰俳諧基詞いとらし九吟孫ものの品ものゝ多ハそれ也その内形ノ俳諧もその一也その形くをわらち新ゝる時ハ俳諧の句ハ如此なる



椒柏酒 事文 椒酒(セウシユ) 同 椒觴(セウシヤウ) 書言

是ハ元日ニ用ル事文類聚ニアリ 山椒酒ナリ

初年

新年 鷄旦(ケイタン) 年のもくめ

三のあしき 初空 とし立 御玉の

日のもくめ 年玉花

もの形ちと初のつのぐ初ちる面しるしきを
初しきる宗匠ちち俳諧をきるとし 詩やら
歌やら旅硯(セントウ)混沌(コンポン)要やら初きぬ事をいひ
ちらしハ俳諧ま迷ひて俳諧連歌と云事を
わきまへさるなり
俳諧を以て文を書ハ俳諧文なり歌を詠ハ
俳諧歌之句を言ハ俳諧の句之才を行(オコナ)ふ
俳諧の人く只徒(イタヅ)らに見(ケン)を言ふに古を破(ヤブ)る

初旦 朝賀 朝拜 小朝拜 奏賀(ソウガ) 奏瑞(ソウズイ)

節賀朝拜 お祝ひ申すく元日ニ群臣天子
を拜(ハイ)しやさるるとうや奏賀 奏瑞も此
時有るとく節賀(セツガ)ハ百官もくくおもを
いふ小朝拜ハ殿上ばかり祝ひをとそ

元日節會 諸国奏 七曜御暦 氷様
國栖奏 くもで笛 腹赤(ハラカ)

七曜 陰陽と 日月 火水 木金土の七曜を
ちるしるよのつまの暦ナリ 氷様(ヒ)と ハ去年 氷
室ニ納めさる氷の厚さ薄さを奏してその
あしとて石瓦の色を奏るなり
腹赤(ハラカ)の贄(ニエ)ハ紫(ムラサキ)よりごてまつりしく腹赤
ハ鯰ナリ 國栖奏とを奏をうくひ笛を吹

人を迷(マヨハ)しく仇言(アダゴト)いひちらしるいと見くるし
きわとの笛童(キリヤウ)自慢(ジマン)ものしく俳諧連歌の名目
をのこれ一家の風を立る面き事之
我家の俳諧ハ麻梨(サビンホリ)をもとしし世我ハ和の肺肝(ハイカン)
を抑(サグリ)て練磨(レンマ)多年の功をつむ面しる
歌句ハ歌端(ホツタン)なれハ其詞いろはも幽玄(ユウゲン)よしく多
文字仕立面しあき文字数ハ五詞のやさあ
り切字を入て生ちくといひつあやくくする也

院の拜禮（ハイレイ）　一日院参の人々院の御所へまゐり礼あるべしとや　晴

御膳　三ケ日ノ供御ヲ云　花ひら餅　四日群臣ニ賜ふ

祇園削掛神事（ギオンノケヅリカケ）　一日寅ノ刻　元日寅の一天ニ祇園の絣殿ニて　松の木をけづりかけ新らしき火をきりて　大ふく雑煮のあと用るなり

新年宴會（エンカイ）　五日　歳徳神（トシトク）　元方

棚　元始祭　三日　惣利蹇女の神を元方ニいそひて饒ものまつる形り

雑煮なと備て　毘沙門（ビシャモン）とく経　若（ワカ）

夷（エビス）　元旦麦ほうくを買ひて　夷回（エビスマハシ）　傀儡師（クワイライシ）ヲよぶ

大黒舞　猿曳　傀儡師（クワイライシ）

鳥追（トリヲヒ）

注連飾（シメカザリ）　稙長　うら白

切字のすいのもと形さへ人の考の詞も切字辞形けさへ義理多分有其句ハ平句の姿をわのちをもくと閑世尤為大の切字を用ゆ凡句柔のるしその柔しるなき基を知たしていろ〳〵麁情せんハ須ニ須を加ふるとく万緑千般ゑ尽ゑ更ニ益形しし先よし題意を探りもとめておのつゝその情みたりハさらんやうに仕立ーー

八翁草
万菊丸
鼾の留

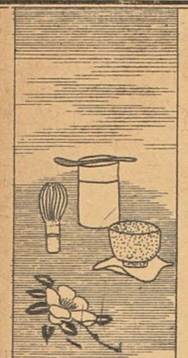
門の神棚　在家の妻戸ハ棚をつくり　夜灯をともしつくるなり

門松　このさり松　飾菓　このさり仔　大かさり　かさり松　くさり炭

飾海老　掛鯛　若水　つゝ井　ひしく

大ぶく　元日おふくまこゝろる茶を大福といひ用る事　彩り

ゆくわ〳〵し



若餅　三ケ日つきる

もちをゆ

雑煮　いものかし

ひらき豆　ひらき牛房　太箸　あのかのかがくけく

蓬莱　まゝさゝる　数の子　田つくり　小豆ゆ　ゆ　かやこの子

くり　くゝ柿　柚ゆ　柚ゆらし　柚ま　野老

搗ゆきる　秋の木のゝ　かさゝと以ハ元日ナリ

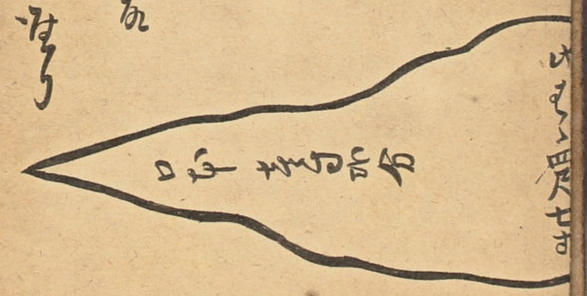
しこてらこ　生海苔をいり　押鮎　土佐日記ま用る

まあり　年男　庭竈　福藁

とゝ五

球打　神きてう　ふるしく

とり合せの句俳するハ石母と以ともとり合するはハ句多く吟速こ初学の人色を田ゆ句〳〵功成ま及人てハとり合ゆ句ゆもさるの禅〳〵ゆま句藁〳〵二品ゆ趣向より入と云ふ道具より入と称り道具より入人ゆ物句多句〳〵趣向より入人ゆ逢吟雰句〳〵礼と楽しゆの位を禅する時ハ趣向より入を上品とゝ道具より入ゆハ和歌流ハ嫌ふゝとゝ



羽子板　やりかるた　胡鬼の子　さきちやうもち　胡鬼板

破魔弓　破魔矢

さまとて　悔をなまとしてあの弓矢をこまてを射て　ロよ

俳句をいとむるすこ　昔の嬉弓のまほひまや

凧　紙鳶　弓始　馬のりそめ　さそ

とし　松のりそめ　ひめとしめ

泥まちくあり　火水始トカキテヨシ　糊糠　可然ら　湯とり始

初湯　多賀湯　寶引　幸籠　年玉　器　年玉の入る

茅未　盒子　門松は陸ひ付て　俳句を神ゝ　傳るこ　門の神棚の新なる魚し

三物連歌　三日　同俳諧　裏白連歌

同俳諧　初鶏　初鳥　去年

今年　ゆくとし　よしの年　ゆきとし　初夢

暦　ひらき　初暦　松雛子　うゝひそめ

吉降　元日の雨を　筆試　清硯　硯毫　吉書

句法句評之事

句法句評ハ尤一大事ニ　都て世人ハ我好むさ
ゝ閑寂しゝ句と人ハ閑寂を好むものハ他何る
句をとゝ仕ゝ世を好む人ハ閑の場を去ゝ仕
是いまさ俳諧の多ゝ入ぬ故不自是ニされハ
先我世ゝ句を功者の人ゝうかゝて其
甲乙を試む事ゝ一句修行の者一句
毒句の句ゝ附句を猶さらの事なり

古式十八切字之事

白雲や花ゝ咲り　彩ハ鶯哉　其角
去ら亀の吸ゝて育つ花の蔭　蘭汗
寒ゝ色と二人旅寐そ　ゆゝき　笛
秋の月　它ニそ人の事き　去笛　永機
人うとし　雑をとゝむる　犬の影　其角
庭ゝ木ゝ音寂ゝ　実ぬ　岩も藻　永機
是をを　ゝんぬといゝ　ふのぬハ石切也　ふのぬとい

三ヶ日　万歳　万事ホ吉祥寿のうまひとゝり

鳥追

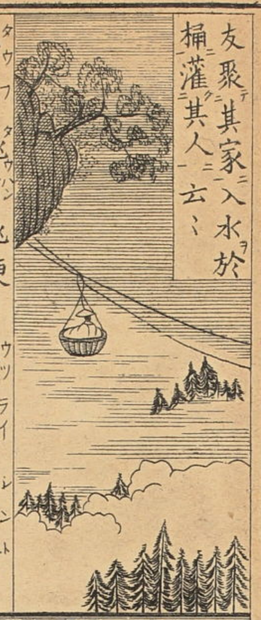
けきう文字

いまつむ

いまかるゝ　せち振舞　節句夕節句小初

店卸（タナヨロシ）　帳とち　松の内　注連のうち

初芝居　水祝（ミヅイハイ）　紀事ニ曰有娶ニ新婦ニ者則朋友聚テ其家ニ入水ヲ於桶ニ灌ニ其人ニ云〻

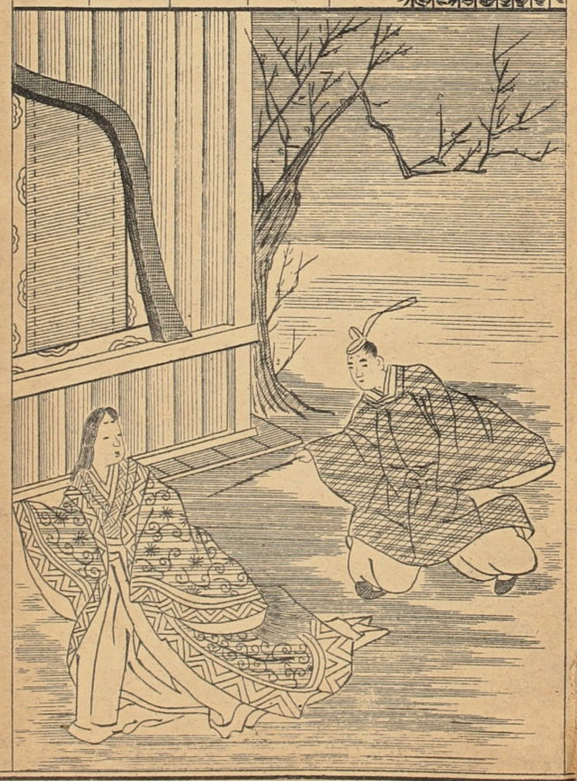


桃符（タウフ）　桃板（タウバン）　桃梗　仙木

蠻壘（ウツライ）神荼（レント）

ぶハ「ぶのゝぬ」「せぬ」形といふゆゝのてゝもこ「不有」と書て「ぶのぬとよゝ」「無」と書て「せぬとよむ」

ゆきまハ不の字ゝかゝふぬの字をふのぬといひ伝り又如形ゝ初形のゞゆきゝ形のかゝりて「を」「ゑ」ぬも「ぶのぬ」も形まり消ぬ異ゝまぬ形とにけせてへめれ字より傳きる也の字ゝ形まきるゝ也能（ヨク）一句の心を味ふて初ゝ色しなほ（ナホスエ）猶まゝくゝ

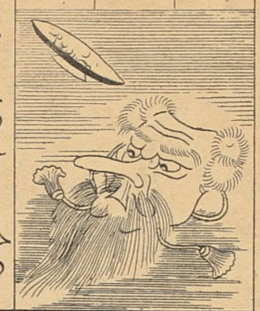


芸ハもろこしのゆらこしゝ桃の木の札ゝ彗星神荼の二神の形を絵て元日門ゝ〻て、凶鬼を防くなり

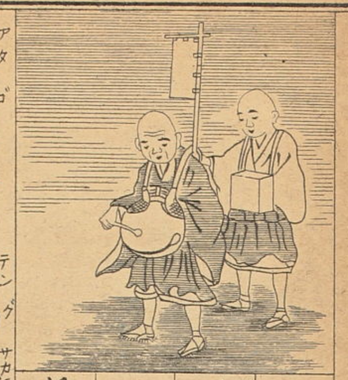
畫鶏貼戸（テツス）ニ　葦索（アシノナハ）

芸もろこしを画鶏を門ゝおき其上ゝ芦の縄をかけて札をさゝしまきめハ八百鬼

ゆるす由を
以り　如願（ジヨガン）　ゆるす形り　初子（ハツネ）ノ
日　子日の遊ひ
小松引
子の日の松



若菜（ワカナ）　初わかな　七くさ　なつ礼　もこへら
芹　菘　菁　すずな　ごぎやう
ほとけの座　ほとけの座　御菜つむ
菁菜搗　子代水菜　ひろ飯もやす
初寅祭　番（フゴ）ゆろ〜　上の寅の日　鞍馬（クラマ）



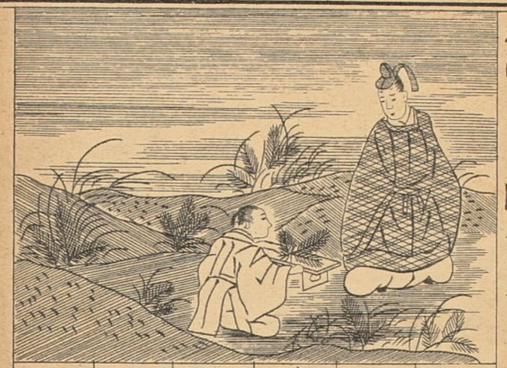
よ年ゆるす七曲（ナナ）
りといひて石ごま
怪石（ヒツキイシ）をいきて
上りちげて麦
ゆ形り
箕面富（ミノオノ）　七日　ゆハ
弛（ゆる）り

愛宕（アタゴ）の寺の天狗宴（テングサカモリ）　二日
弦指行之
卯杖（ウツエ）　卯槌（ウツチ）　清杖
上の卯の日なり
色くの木共を五尺ニ寸づゝ
よりて二束三束ニゆひ

いさ　いさ　雷見て　ころぶ所迄　猫
イク　時雨　雨もらの　笠　雨覆　老鼠
イツ　雲て　山りさんらの　滝　月　湖（ミヲ）十
ナニ　よの　何大下ゆ先の　花の　夷　鼠肝
イカデ　海面　木をいそ　時雨の　松の　蕚　風定
ナド　咲時も　形と　昔より　花ゆ丸　江た
ケリ　鳴鳴け　起て　いさり　夢の　蝶　永機
カナ　多雨ゆ　餅さ〜　ひとの　時ハ　其角

モカナ　蕚きくら　菊その外の　ゆハ　形くも　嵐雪
モナシ　世の中　鼠　修の尾の　像の　形し　凡兆
下知の　詞
友猿の　とも　嫌ま　ぬ　花衣　其角
胸中の　兵出　よ　こ　の　月
へ　民う〜　九月　菊の　花の　蕚　永機
此他　ケセテ　ヘメレナツ　ゝ略下　怨事　全
右十八切字也　此外も　疑（ウタガヒ）の字　切る　之　亦二字切

おゝやけよりをゝ仰せといふ〜〜〜 公事根源〜アリ源氏物語〜ハ仰つもとも



政始　四日　皆群臣ヨ花ひら

もちとりのものを陪ら

御歌會始

御豊尚始

海陸軍始　八日　九日

御慶　年始

三字切　二段切　三段切　雜の句　かく〜〜　題

十八ましま　十九ましま　傳受さる名し　されと

ひの〜まを　別して　初学のこゝろ

世〜十八字　七切字といふ　古法なり　平仄

切字　助辭　きものをさゝりて　字〜ひの　俚

言を　漢〜　管絃　雜なる　物なる　次ましまし〜の

詞句を　学たると　名世ひるる　〜〜　雜中

仔　假名　ハ　ま〜〜　俚言　助り

二宮大饗　二日　二宮とハ東宮中宮の宮ヨリ王御以下二宮ヨ参り

てれ礼あって　答ヨ付ひ〜〜　朝覲行幸　二日　天子年始

毋后の宮〜行幸ある〜〜　朝覲の字　礼記ニアリ　臨時客

皇ハ　摂政　関白　家ヨ　大臣以下の上達アを

招きて　越ひ　殿〜ふひの者〜　定　昌る　公卿

ハて　この　ほハ　勅ハ　中〜　多〜やく　千疫　万病　延喜式

元日の陸奥ハ　三ケ日　きこしめし　さて　四日ヨハ

きさ〜やくをさて　まつまり　銀器〜入てまる

を　名指ヨつけて　陸奥　毎年　のこらヨ付

させらる〜〜

後むるや

歌集のや

題のや

疑のや

後むるとハ　必〜彫りの　年数を　永く　残〜る〜〜

歌集とハ　万葉　古今　後撰　拾遺　後拾遺　千載　新古今

題しきやナア　樂〜さやナア　なと　字数を　引きて

思ひやる　さの　傳きを　いふ　後むるやの　一名と　知

る〜〜〜

彫のやハ　共彫を　あ〜て　作りあ〜を　いふ

或ハ　峰半　しのやとも　いふ　赤ハ　情怜や　ひあや

るを　物を　呼　おもるを　とく　他　坊　ヨやこそ

ヨやなとも　おるし　早　美　歌集の　さのかるを

かゝちさるを　ものを　ある　の　目　ふ

種〜の　名を　付し　ものなり

疑のやハ　やの　字　下に　引　名　るとの　て　ヨ　使

を　お　今〜　て　きて　俗　赤　ま　も　俳諧ハ

字　数　ヨ　形　きもの　ヨ　五七　清　詞を　解〜　さる　句

多〜　五七　解〜　さるも　十七字の　外ヨ　引

履端の慶　履新之慶　正旦書を
なす人を
なすを初と履端も人
を祭るを初と
を奏して位を次第に
叙するなり　叙位　五日或ハ六日
諸臣の年労
白馬節會　七日
あをもまのせち　御弓の奏

七日正月　一月七日　人日　霊辰

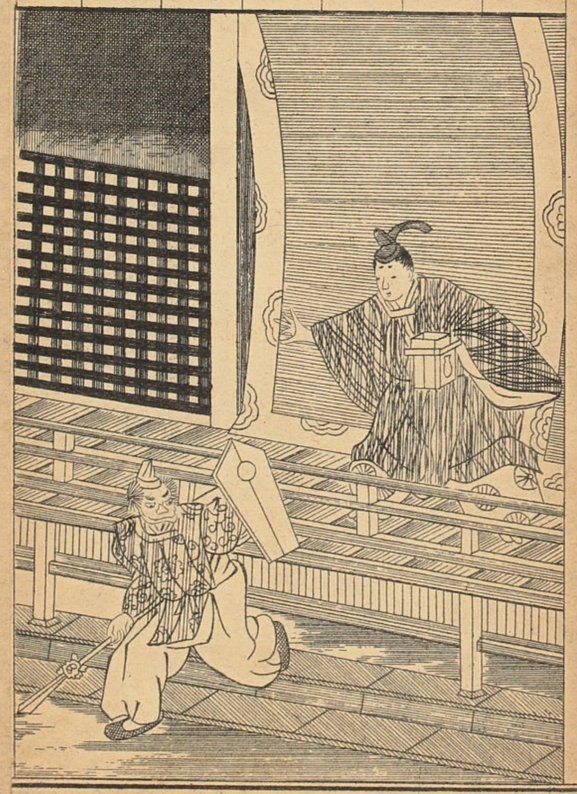
人を帳に貼す　正月一日を鶏とし二日ハ
狗三日ハ猪四日ハ羊五日
ハ牛　六日ハ馬　七日ハ人日とす人ハ万物の
霊ナル故霊辰ともいへり

菜摘川ノ神事　七日吉種ちつての
明神ニアリ

御斎會　八日大極殿にて十四日より七日
ケ間最勝王経ヲ講せらる
て初めを祈り　真言院御修法　八日
より始まる七日の間ハ七年金剛
界胎蔵ハ四年ハ胎蔵界年ハ
〳〵修せらる後七日の法法とハ法ヲ
ありけり字法ハ禁中ニアリ〳〵也

太元師法　法都者まて行ふる
師ノ字ヲヨマス

女叙位　八日女の位階を叙せらる
事あり



ゑんるとゑんへ繋がる仮名

頼のやハ頼やと切る〳〵仮名　削タイ　見タイ
るとよ繋る心
引ハ字ハ物を結ぶ時〳〵用る文字と赤ゑんも
特のやとハおのの〳〵ゑ形るゑ文あり特のやも
他を思ひやる文字ゑりりハそまこ〳〵こまこ〳〵と
きゑりさ〳〵面て問ふゑ如きと仮名へ〳〵
よの字ハソレヨ　コレヨと仮名いの字回〳〵く
ふと繋り仮付る如き文を合て切る〳〵て
ハ不ゑふあり　下新のよとハ別あり

引ハおもふ沿定〳〵てきるゑと仮名を
咲良のかなハ余熟を引きてきる〳〵也句模
ヨりてハ別の字に大〳〵く頼の文を合
もつり師ヨ付く〳〵ゑぬへ〳〵

頼のや

り

よ

引

女王禄を賜ふ　八日参議解史なと叙明門のうち幄座まて

女王小禄を賜ふ事ハ女王禄の女ノ字ヨマサル人

常陸帯の神事

十日常陸國鹿嶋の神の祭ふの日女のけさう人のまさある時その男の文ともを布の帯に書ていのめて神ものおくてよく中ーうら返りする帯をえて女のけ帯の中うるろきてきてかりもてを帯ーの如ーの男と親ーく　夷祭　十日西ノ宮ニて行今日なるるゑ名抄

大坂今宮の夷のやーちゐも祭アリ

十日夷ホハ鞠　夷と云ノ

縣召ノ除目　十日より十三日ト已諸國の受領を任せらるゝ事とや

御

赤

願の引

決定のぞ

疑のぞ

中のぞ

現在の

その外の爭下ハ結せーめ〜まアと余韻を引きて切る〜係ノ下紙の引とハ別ノ願のかゝハ引るとたゝふ係ノ此のハ留りて後へ〜トモ有タイ　トモ有タラヨカロフなとそ也それハ考るなり

つもるぞともいふ

疑のぞとも上ノ結の挿形を待て切る係なり疑のかざーとハいりいつも　なに　なそ　さそ　いくふ　いそ　いく　やり　なとなり

中のぞハ上ノぞというて下に引るーきなとのてゝ中皮ホ結ひて切る〜定係ノむうふーともいふ　イキクウハ通ふく　ぬうし　たうし　あさし

齋會の内論議　十四日法華会の講師　ケチクワン　ヲ　ヨ　ヲ　ヲ　ヲ

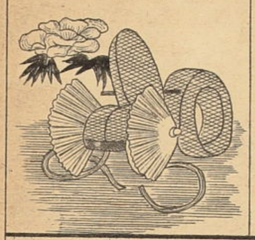
左義長ハ紙合戦ハ打る球打を神名苑
ヨリ出して燒あるをつかよ〜佐世茶〜えさり
今の世よハ三きりの松竹を門口に
飾とかつめて祭るすナり

上元日

十五日のすと唐まハこよひ灯楼をえるすアり
々提灯を多く付る夜ひあるなり〜

御薪 十五日 是ハ百官をく〜薪をさして
まつりて宮内省ヨリ納めらるるなり

かゆの木



うゆ法師

ちつきを法師とまて女の腰
をあり戯きなり

小豆粥のもち

十五日粥を炊て今日
天狗を祭ハ年中の
邪鬼を除く

平野の粥

西四条ます社
の神なり
粥をさして田畑の
吉凶を相占る

獅子かしらの神

いせ山田ニアり十四日ヨリ
三日之ヲ行フ

賭弓

天子弓場
殿ニテ弓を
射給ふる
るなり

厄神祭

十九日八幡の厄神
の宮まゐり

て、種民将来の札を
もとめて帰るなり

鼻足の鏡わり

開トモ
二十日
のさるハ元日ヨリ
割ハ今十日ま

二十日ゑんご

世俗廿日正
月とのり

つ

つ

盛り

盛りとハ
ものの
ものの
ものの

骨（ホネ）

正月　京坂新年ノ喜祝ニ鰤ノ脯ヲ用ユ　その魚の骨ニ大豆酒糟ヲ入て煮熟シテ為節物

菓餅（センベイ）を繋（ツナク）　天雫（テンセン）

もろこし江東の俗正月廿日紅の糸にて菓餅を繋て屋の上におろし是を天雫といふ

内宴　仁寿殿（ニンジユデン）にて行る文人題を賜り詩を作りて御前（ゴゼン）に奏（ソウ）す

るとや　吉田清祓（キヨバライ）　十九日　女子吉田

十九日　女子吉田　疫神（ヤクジン）に詣（モウ）ル

忌（キ）　廿五日　京知恩院（チオンイン）にて法事（ホウジ）アリ

外記（ゲキ）の政始（マツリハジメ）　御（ギヨ）

福茶（フクチヤ）

ろけて切るゝ　タコトデアラウ　タモノデアラウ　タデアラウ　なとを色〻に何るし

らしハ　ろ　に迫まて布使なり其も中に赤を

赤ほと大抵何るなをもつてさつ是る祖父便言

サウナ　〻しハ　〻らしの佐〻まりるんるらの

反らし

べしハ　かゝありてよきわとやとまりさゝめて

いふ祖父　ハズ　ハスジヤ　リナ　サウナ　なと言葉る之

べしハ　らしまゝびやまし　ゆえは便言もゝく

移ら祢と平神秋と布ふ是るとを言葉うとのたらひ

あり

かしハ何とあ目このしなとその理を見もせんと

是る祖父形ふをを合葉むなり

なりハ便言　ヂヤ　デアル　又　ハイ　と為るあり

寒梅

寒菊

みきのたゝ　みきの

赤〻とめ

茄燕（カラカバ）　乾皮（カワ）　ゝり　獺魚（ヲツル）を祭

月令

かきの巣（ス）　月令

鶏法（ケツレイ）るゝ　月令

土牛童子の像をうつ　大寒の日夜

半は陰陽の大牛童子の像を門口まつり慶雲二年天下疫病さこりて百姓多くうせさりしかハ土牛をたくり追儺といふすすもまれり延喜の書ハ農事のこめ時を志めさんとて土牛を立るより元元さり亦立春の前五日に土牛を作り農具を門におきて百姓堪を作りて勧ること農事をすすめるなり　土牛童子を紙にすり古くより師走の影に出さんと大寒の日ハ今一月ハいとせ

寒念仏　寒念仏鉦を彫つふ

寒曙
寒作りの酒
寒迎き
寒行

三冬盡

孝明天皇祭　三十日　追儺　おにやらひ

爆竹　おにやらひ声　驅儺　節分　爆豆

三冬盡

三撫や　危の嘗ぬけ男　恒丈也　永機

四疑也　源氏もや春を吟ぶの家の夷俗　甚角

五ても　秋もたやもたらつ雨月の影　笛

六すらも　かりくやと初花ぬる外の梅　老蘭

七日合や　ちるよりの嶺や桂や社樫　蘭肝

七外形や　芳を集て呼ぶ和の一初　仮　笛

八　有や　めや　やハ　とや　ちとや

此やてまるやと

七五ツのやこの字取くてもあれ一道能く練磨ひ

廿さまをいひさゝんうための詞

七かりといふハくありのつまをてるゝくあの反らせ伸ふ　なのりとりといふハまゝかりとりといふことあり七ありとゝる詞ハ多くいつるゝ如く平さまをたゝる詞をそゝきゝ　ゝ　といつるたゝ　ふ　ゝ　をさあていふ詞と重ほてくなりとりといふ詞とハるとゝ

こそハけせて収へめきのて外ほ結ひて切るハ四俗とさるるきハ変俗と知て

こそ

切字詠句　や　字七ツの沉者にるる

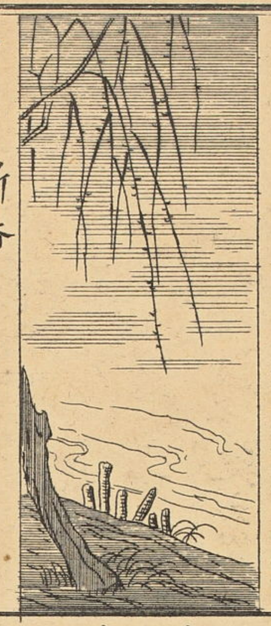
一切や　ケ　ち　ゝ　や　会を　カ　ち　苦　ろ　ふ　笛

此や浮世ゝ咲ほる面ふ

二中ノや　空や　秋　切　ほ　を　の　ケ　ハ　七　多　雑　林　甚角

二月 新春

初春月　霞初月　早緑月



梅賞　梅さく　赤鶯　挿

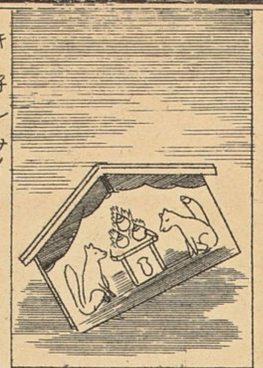
なをしの頸を挿　土佐日記

睦月　夏正　太簇

立春　三日或四日

雨水節　十九日

中和節　一日　唐製



祈年祭　四日　豊年を諸神ニ祈ル

紀元節　十一日　神武天皇御即位日

引見　十一日　大政官ヨリ六位以下の藝能あるものを撰びて器量実伎を見こなら上卿以下冠さ袴ー羅をきた

哉と格の事

治定の哉　ふるかりもきかるき家きの哉　吉来

歎嘆の哉　海の皷鼓の色の眉をよまる哉　永機

疑の哉　山さくら花を折りて指す哉　甘角

痕跡の哉　花あやめ幟もくるこのうち哉　丶

沉こむ哉　雨ふる時風のふきも聞き哉　志蘭

此外肝心ノ哉　吹ぬらしの哉アリ

決定の哉　をし殿をて揺みせうそ松笠　公羽

疑ぞ　かつらきの神いかりまそ桜の枝　甚角

中のぞ　口切りく堺の庵そ為つらき　翁

よ　金屏の松のちさよ冬籠　丶

現在の　馬の耳をかめて寒し梨の花　志考

じ　我も占じ社面に人のさめ鳴き　岱雪

未来の　猫ひとし花く咲り神の新　翁

らじ　時雨降さもの思じ旁の旅　永機

つ　年もとの水をを流るる後川　素雪

初午　初の午の日をかうて祝ふ

稲荷をまつる

水間祭　初午ノ日泉州水間寺本尊

季節詠往

仏事松陰曰二月八月大般若経を百数て読せらるゝ貞観の御時季ことに

をけり

あ

う

ん

ら

ん

ち

け

し

へ

し

ゆきうし船荷くゝ切る桑の門　湖十

秋の京尾上の杉うも花さかり　其角

岸焼のひとりそのゝん竈のもと

仏禁を不ケ信らん雪の君　指巨

蹴破て卯出ん時る　嵐肝

多本をされと揺さてうし　光嵐

花さうう大塔中さかり　杉風

そろくのゝ抑ゝまるし　菊

厄除観世音　東福寺ノ懺法　初午ノ日観音三十三幅の

像を掛て六根の罪を懺悔もるの法なり　摩耶祭　初午日摂州慶

耶山近江の人ちら飯の多羅を祈り土産ま昆布を買ひ帰ル是を戸耶日比布ノといふ

稲荷御出　稲荷の御旅所由ゆ深七条南にあり此神二ノ午日出

二ノ卯ノ日　吉野餅配　一日金峯山寺役ノ行者

開基此日本堂の庫裏にて餅をまく是をもちくそりといふ　行基

糸　二日摂州昆陽寺行基の弟子　繹奠　上ノ十日祇園

像を祭る

二月堂ノ行と

一日より十四日まで

同水取

若狭井といふ若州遠敷郡神宮寺より献閼伽水云々此井常に水湧くして二月七日の夜半に始て法終て此井僧侶掬を待ひ来りて汲取とよくいおのつから湧出るとなり

薪ノ能

七日より十三日まで

至る南都興福寺にて是を勤むこの会ハ昔陽より陽に至る

をもつて多くの薪を焼き猿乗の芸能を施こ

ゆゑ薪能といふ

又芝能ともいふ

春日祭

上ノ申日

大和国春日郷大原野祭

上ノ卯日山城国乞車根原云此神社ハ后宮のまいらせ給へ人さあ夢日ゆゑ社遠きまゐりて

ましく

ありあり

なり

なり

いふ

いき

弱うと嵐の味を問てましく

鶯ハ春を告げ初し月の時

鳴て実に丁度春の夫婦

生る魚ハ春の生業魂

人る秋も風もうすくなる

歌賢の人ハ春の雪

猿を聞人ハ秋の風いふ

樽とる為ハいつまゝ多かれ

其角

指直

翁

嵐外

如柱

其角

翁

世界をなげかしハ浦月見舟

丈山の庵ハいりこ丁板の音

花ゆゑの命ハいつも現代

史邦

湖十

下総の郡

猿ありしハ猿ゴトして御子時雨

一月ゆゑ来の毛孔ゆゑ

如意する歌ハ明ハ此の懐

仏を聞きる音ゆゑ

其角

丈芽

永機

翁

け

せ

れ

て

祇園御八講 八日山城国愛宕郡

八坂郷 遺教經會 九日より十五日まで 瑞應山大報恩寺

釋迦堂洛の上を賣朱雀の西 東山智積院

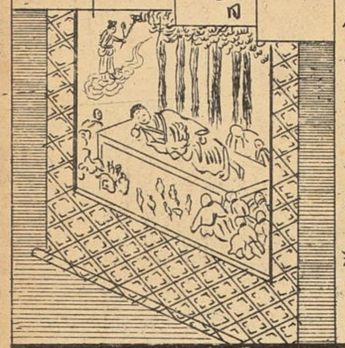
の僧徒共を勤む徒然草 千本の釋迦念

佛とゐるハ

涅槃會 十五日

涅槃像

二月の別



佛のわかれ さりし御

嵯峨の柱炬 十五日清涼寺釋迦堂の前に大傳松を建て

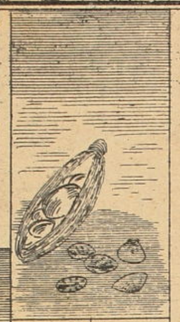
暮るゝ日を点ず

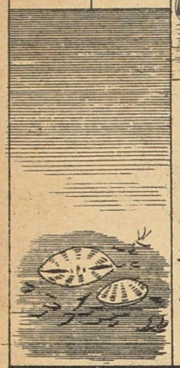
餅花煎 餅を貯へ

置て二月涅槃会

に煎て供ぶるなり

積塔 十六日 検校以下





衆多こゐるを

しゅうあつまり集り

雨夜の花を

花り 琵琶

や

家の戸を初夏也植夢かゝし

ことゝはせそ小牧の中山まて深め

を四

待ゆの久しきを花七日 正機

大四

咲きうとゝ知るゝ雪佛 嵐肝

此外四とまり三股四とまり 親句 疎句の

二義の事 句を嫌句 三字 三字

も主 去妙義句し事 師を仰く時也へし

歌題俳題の事 古歌古詩の事

俳の事 名所を考ふ句法の事

さらも知て居まゐ知ぬる分編を捨て称

説面

第四義句 隈くとゝいひ出すものこゝ尽とな

支考傍ら立て大一感謝 始て義句とゐる拙

を紹作と中ものかゝり 知て句いひ果ざるも

を孫す　圓宗寺景勝會十五日の間

聖靈會　廿一日摂州天王寺聖德太子の會式之　淺

間祭　二十二日駿州安部郡浅間杜祭神木花咲耶姫命

北野御忌日　廿五日山城國　吉祥

院八講　廿五日河内國土師村　水口祭

本朝食鑑曰凡稲苗不得水則枯故祭引苗代水之口

比良

八講　廿四日江州志賀郡打下　氷解　氷浮

未練にいひ過ぎて又痛ひし

凡句といふものは冠を出へまゝ中を上へやり或はもゝのトーホヲもトするの類ひは一体趣向をもとりて一句いひ放ちき故に極て省略とい年のこゝ遠てその趣向を捨心を轉して句案すべき事

附句之事

脇

氷解　魚上氷

雪解　雪汁　雪流垂

殘雪　春残雪　泡雪

凍解　沃之る　餘寒

山笑　臥遊録曰春山淡冶而如笑夏山蒼翠而如滴秋山明淨而如粧冬山慘淡而如眠

佐保姫　春の造化の神なり

春は佐保山の神よりおこりてさを山の面を乃色をよせて春を深る神なりとい年れは貞徳神孫もいゝ紀巴の神孫とせしは理なりとの説あり考説去る べき乎

初東風　初霞　霞　八重霞

霞汲　海あり　天仙の酒を流あるとかく　霞ノ海

霞ノ浪　霞ノ沖　皆花にてつかまつり　海浪等の

うつり引しあるさまなれ　霞ノ細　霞ノ衣

霞ノ袖　是もあるいはつゆ同しく花にたとえる

小夜衣くもあり　又は　細く入月を引や漢の歌の呼称　正徹

鐘ノ音　毛　寺の名所にて鐘のかねもむといはるゝ

霞洞　仙境を云又　霞　濃霞の白雲より

院御所をも云　三季と　長閑　麗　暖　ぬくゝ

なる　のとかハ温和暖和とつゝ字なるとも鮮あるまとも

古くより書慣なしゝ文字也例の俳諧

の歌詠に限ることもの

うらゝかハ百花咲ならまを歌山川まそも

いろめきて　春をかなる　さそ

よりて　花も三季あくわるる　水ぬるむ

春雨　春風　陽炎　風絲　遊絲

野馬　荘子曰野馬塵埃也生物之以息吹者也郭象注曰野馬遊氣

脚ハ蒼白ゝ　ゆ　時ハ　時　遠ひ　ゆ〜〜

打拂て付　しゝ　みなまて留る　ゆ　とめ

口傳　一句　一句のよそを考て附ハ　蒼白

本意　すゝ　蒼白の　景情を考ふし

相對付　打添付　遠付　心付等　四ノ躰アり　譬ハ

八九間　面　俳　柳　の

寺の　形の　間　る　形

その場を　字　明　さ　めるなり

苅稲や　水田の　人の　秋の　雲

昏　のるゝ　代　る　鳥

蒼白ゝ　場の　出る　形　時　を　字　明　定る

梅ゝ　よの　り　日の　出る　山　海　代

ところ〳〵　雑　の　鳴　を

蒼白ゝ　場も　時　句　ル　如　さ　ま　ハ　さ　時　節　を　定　る

市中　ハ　の　白ひや　夏　の　月

暑　し　く　と　門　く　の　形

也希逸注曰野馬遊絲也水氣也
亀山殿百首

[illegible]

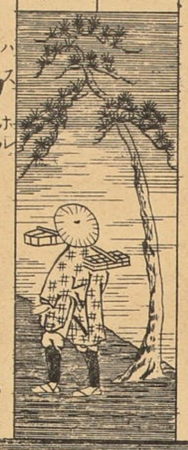
永き日　日永　遲日　出代　新系　今年より
古系　二日灸　梅花衣
鶯衣　鶯袖　柳のきぬ
一説に鶯衣鶯袖は袖の腋隠る衣と
又春の南季の色をいふとの説あり
木地煙　冬の間い生の塗の炉[illegible]を
用ゆ中ゆ間春まさに生目を

[illegible]
ひとり松　生所より浦の雪
暁[illegible]を入る月
[illegible]
時を付る仙の杖もつり
面の[illegible]
[illegible]の堤
鶯去[illegible]つ[illegible]り社の雲

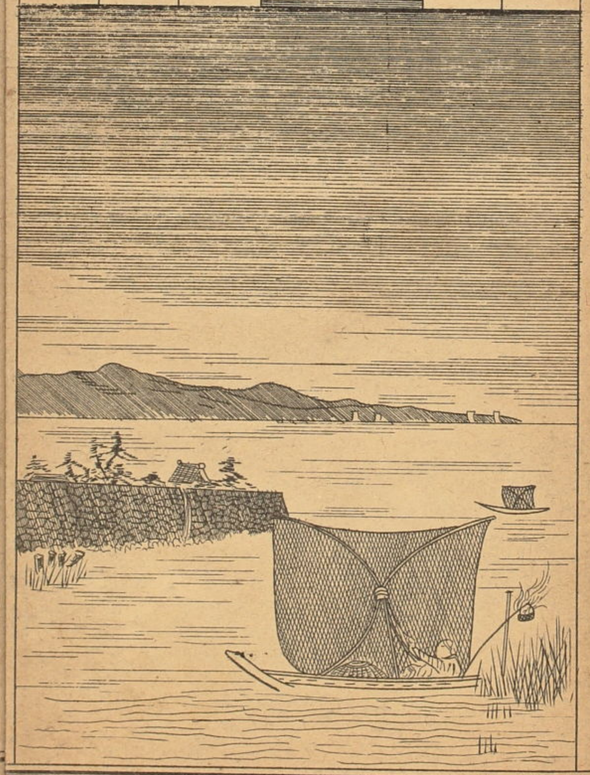
[illegible]の[illegible]の[illegible]
鹿尾菜
海雲
若布　和布　弱布
石蓴　海蓴
海苔類　青苔　乾苔　甘苔
神仙菜　芥塊苔　桜苔
鶏冠苔　興津苔　浅草苔

[illegible]
[illegible]
[illegible]

磯菜摘　摘草　下もえ
若艸　新草　初草　弱草　嫩草
緑草　等四〜　鶯菜　水菜
藁菜　蒿　艻菜　薺　蒿摘
蓼菜摘　女菱　三葉芹
芹　根白艸　角ぐむ芦　芦の芽　芦の錐
蕗乃花　蕗の薹　若葉



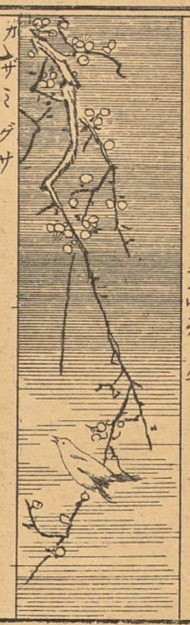
青芥　辛菜　波蓼菜
防風　珊瑚菜
獨活
山葵
慈姑　耦堀　野大根
青饅　魚膾ニ芥葉をくゝりて酢ニ合せてるゝ
柳　川柳　青柳　玉柳



天地より人を生シ四民ニわるゝ如し中ニ一物の坊ちまハ手白と唐ひ微細マネ捌眼白よりハ丈高を有ニとて留ハテとあ宮とて世多白眼ニテ文字形今ニる時ハ二ラン、モナシなどの内ニて留へし世多白哉とあの時ニテ留ハせぬゝよきく哉ニ面ふニテ形らまハふ若浜宝の武ぬて三テニ面し
中三ニ杉形太山振りと二格アリ

美称ニ 樫柳 雨師 門柳 柔柳 堅 直メ

不接 瘤柳 剥其皮則有如瘤肌



風見草

あのさらさらの指に風ふくさのとけきいろのうちなびくらん

柳の髮 柳腦 柳の眉 川柳 柳乃嫁なるもとみ女の風流なるこゝ立ていつゝ

むら雀日和宮る声高く

杉那とかハ翠ばの姿杉のかと古寿弼

中ゆらゆらさらゆらと伸るさまし むぶ

花彩ゝ立てと白の心ばるやゝ仕りてゐ和

宮ると冠るしさまをハ一白の姿正白ま孫

ものうけ宮るき也

太山振

松の根能治ら冠の面まて

椿 白、赤、玉、列、椿

巨勢山乃列々椿都良々々ふ見乍思奈許端

乃春野乎

此ゝ宮より他例とあきらと

宮ハ玉よの色ハ

ほやゝらるもと

いひ枝の あるき也の

列なり 咲ゝる也云と者吟いつり

梅 花の兄 花の先ゝ 飛梅

太山ハ素山を伸るき形ゝるやゝ仕せよと之

能治ら冠の面ひ来てと白を仕り後ゝ松

の根とかゝるゝ松根りと立ハ白の宮

かゝこく翠ハ雑兵の佛ら切し宮ア 三

正白の白ち形りよゝ味面ゝ

よとあの宮

新面ゝ宮形らゝる日彩ゝ

ま留ハ下五字よりよゝ之さゝやゝ仕宮

錢梅　綸旨梅　鶯宿梅

好文木　十三夕仲　白仲

香散見仲　野梅　紅梅

鶯　金衣鳥　白ひ鳥　ゑのあ多

経よし多

み黄鶯　黄多

春さき多　智黄

歌童　黄袍

金衣公子等と称

うくひすとよめり

百千鳥　三多の一なり　ゑるなりとも云みなの

諸多の鳥をひふともひとり他鳥ゑ

ゑ多の鳥おももさをいひしり白多ゑる居きり

鸚鳥　琴弾鳥　宇曽姫

甘彩囀りかく彩く多つく啼時あ

仰を高く挙げまた揺らして琴を弾

うことしゑみ形ち

叢しく彩く艶なる

ゆつゝ宇曽姫と

名つくとひとり雄ハ

時を呼ひ雌ハ

雨を呼ひ雄を

テリウリト云　雌アマウリト云フ

と森字とめ

刻字とめ　書白色い体の時を一しゑ心

体の白ハ書きもの形をしく　口傳　白仏ハ上こ

ゝゝひの字を畫つ

もの形し

山かゝの心を引つきゆの形し

白素有のまゝ言下す色し書白の如し

とハ経重のさらひ　口傳　此外韵字とめ

異体　東三のゑハ師と付て字ゑ色し

てとめ形らぬてとめといふ　コレ

師僧を受ゑ

四白目の事

四白目ハいろもすりくと仕を服白よりも引

さけて軽く仏を四白めりといふ也留ハ

引形り形といひ流しるよろ

赤文字とも書る　三四　三五　五二　四三の色ゑ

鷺　鳥轉　水鳥　鵜　うそ

換　筑前太宰府　むさゝ亀井戸まで行る　魚氷

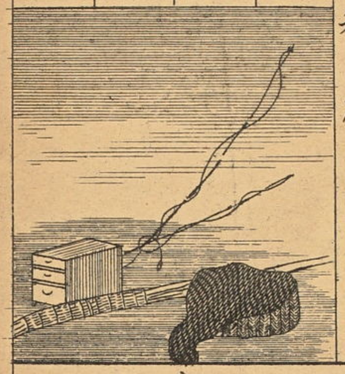
上ル　孟春　歩端の氣に蒸して　魚泳生て　氷とのぶる

白魚

飯鮹

蜊

蛤　爵入海水化為蛤



蜆　鰆　鱒　初鮒

猫の魚

五句めよりハ位ひ引さけて書くよ句

掻き他をよゝとそ

十句の内というて面も同じ形ハ

百韻要仙とも裏こうすくさ無ひ

けや書ものを出すを不可

月の事

月の字ハ面の内を能とも一の脇ハ

百韻ハ七句め形仙も五句めと附ほりて

ゝり脇亭の捌ゆべし

花の事

花の句　本正花なの山百韻ゝ四ツ一の詠之

元花の句一折の内定座ハ形けまとも賞

既の景物ゝまハ初心ハ遠て無すべし

功者ハ麁句をゝ念と思ゆゑゝかくまゝ時

ハ「十三句め要仙ゝ」「十一句め定座」

定座ゝ詠時ハ句さしてよかゝぶるも

三月

仲春　陽中　如月　初花月

小草生　夾鐘　啓蟄　五日或六日

上巳　四三月　三月水辺にて禊をなして疾病を祓ふ
　　又周の世にもこれをまねしよしを堺山井に
いろり月令廣義に謂上巳　十幹之巳非干支巳之巳

須磨御祓　是八深民須磨人左遷の時三月の初巳の日に浦辺の祓に人形を立たまひて祓の具をなし祓除したまふ
　　む須磨の祓を
　　真とせるなり

桃花節　三日　桃酒　白酒

菱餅　蓬餅　麦餅

雛祭　雛遊

雛飾　雛を左雛　紙雛
母子　大兄　糸雛
母子は紙偶人也母子の身体を持してあ遊ま
おきてこまきを解除し禊るの微意を修せ大
兄も母子の類なり
世俗の慣習にて陽唐吹彈
も雛祭を吹て婦女の遊び
日と成り鄙その祭るぬの異
あるまるくまるぬ品妻の祭物

子細なし

花ゆさつらけるるなひかり
高き樹ものは正花を開るる

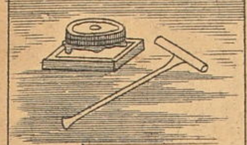
小家〳〵桃の宮中
今花のさし出をみて七夕
面よ花の出るる
幾句服来こゝに陽るる奥し裏ろうるる
ろうるる勿でをるるしうる

とまとして二月の題小編入きたるものゝ此数多し

曲水 埃嚢抄に云曲水の地勢八巴のごとく仰こう流杯閑の世の流れ

久々絶えたるを魏文帝又奪せり云々

公事根源曰むかし江郷あと多り古歌を作り詠せしまゝ今の流水水小盃をうかべて人々に見せのむよし康保の後記この世にもこれり



鶏合 堀山井云天禄元年三月四日闘鶏の式あり春のとしも科あり

又し

青きを踏 唐の俗上巳ホ士女遊戯する

をいふ今八月の遊び

春季皇霊 のるまもいふ

月ハこゝろ

祭 二十日 **彼岸** 十七日或八十八日 **時正** 時正ハ彼岸の中日をいふあり中日ハ年中の昼夜乃長短あく同しきゆへ

昼夜の正しきを以ていふ

社日 社日ハ云地の主神也立春 才五の戊の日を春社といふ立秋後才五の戊の日を秋社といふつまり社日ハ

社菊雨 社雨ハ孫日社公社母不食日水故社有雨潤之社菊雨

治聾酒 社酒を耳聾きを治せるといふ

彼岸櫻 糸さくら

おこさき櫻 **御燈** 三日 公事根源曰昔ハ天の北斗小

こゝろ

こゝろ

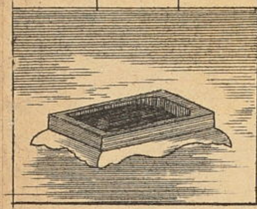
こゝろ

咽となり給ふと芋人北山吳岸ちあとゝふ所あるたりき
峯ゝ火をとゝり〜北辰ゝ供せ〜ゝ生ゝるよし一条院の御記
ふとゝ見

つるり 柳ノ髻 唐制三月三日賜侍臣細柳圜心八帶之免蠆毒夏ゝ故ゝ柳のか

つゝもとく成重し 経供養 三月御

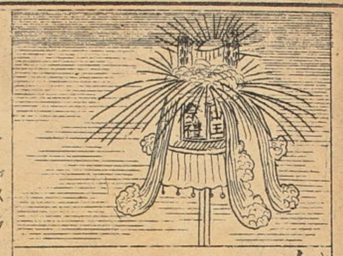
四天王寺 石山祭 江州石山寺の護守ゝ



八所明神祭禮 一日より三日まゝる 粟津祭

三日 江州多居川市吳 一条寺祭

五日 八大天王ノ社生洛北 一祭ち東ニ



修學寺祭 十日祭神午 託天王

式云赤山明神 祭式未詳 水尾祭

九日 在丹波国宮宕山傍

高雄法華會

十日 神護寺 安良日花 十日 或説ニ云ま花 註多ゝて彦

芸を借み風雨あきを祈るゝの故ニ安樂芸と唱ふ
とゝふ 一説ニ云雄山神護寺法華会毎年ゝ生い廣
懐あり故ゝ躍を儀し粧ゝを〜〜ふ芸を安樂芸と
いふ亦法華会やゝ〜ふまてゝとゝのふへきをかくゝや

句ツキテモ不苦

戀の句

いゝ〜へ恋の句数定〜ゝ宗祇宗長以ゝ
句の式ゝ 字ゝむ五句去ゝ 佛ニハ三句去トあるゝど
百韻ゝ二ケ所ゝ寄仙ニハ
二ケ所とおゝ句ゝ

恋の句のゝハ古式を用ゝそ句の故ハ嫁娘女房
神郎の文字ゝ句ゝ句ゝ句

[illegible]と地
[illegible]山[illegible]
[illegible]花と鼓うちあり　西行
[illegible]アリ

薬師寺　**最勝會**　七日より十三日に至る　**白鳥**　**涌寺**

開山忌　八日或八九日　**吉野會式**　或ハ云花會式　昔參孔アリ

禮物講　十二日　**獻**ハ於ハ王ち　**石清水臨**
十三日　**撵**　彩之

時參　中ノ辰ノ日　**善導忌**　十四日　東山禪林ち　**祇園**

一切經會　十日　**鎮花祭**　十四日　春花花ふ　比叡神ノ
散して人をあやまちをちつたんさあ神[illegible]
れこるもてもと公事根源と出そう

壬生念佛　十日より
昔日と捕ニ立地ろく刻ちど
年ちとしいふ根言アリ

壬生祭　[illegible]
いふるくし

千本念佛　[illegible]
閻魔

東寒食通北ノ浪舟岩山ノ南　融通念佛の金流之每
年正月ノ菩提樂橋花の開ヒ始とも此所をよみと
いふ多菩提寺　[illegible]の日花上人寂滅三ヶ月にて均ちるの
あり其為ニ千本の卒塔婆を船岩山ニ立て供養
を修ス

比良祭　十五日　江州比良村

梅若祭　十五日

降物　暫りテ二句去二句ツヽカス
聳物　二句去降物ニ二句去
風体　三句去二句ツヽカス　松莊[illegible]ちの色ハ
風体二句去
夜分　二句去ツヽキ句軽重有ハ[illegible]ニ[illegible]ト
暫り明ニ著すへて此[illegible]時ふ句二句去
吟味の句　二句去
行歩ノ句　二句去ツヽキ不苦

故支和漢とも用ハ[illegible]ちら[illegible]耳達きち
ふ好
物語りの源氏狭衣　昔ヽ二句去　今ハ西モ去ヘし
凡全の体ハ幽玄とハ[illegible]て歌の心詞うちちるよ
ゆ[illegible]て行[illegible]迴雪のすゝ[illegible]をおりひ入[illegible]ニ形幽
玄のうちの餘情ニ
[illegible]ま[illegible]ハ[illegible]ま[illegible]ニ[illegible]限り
[illegible]ハ筆をき[illegible]きりの形らし

東京隅田川梅柳山隅田院木母寺角田川大師佛ト唱ヘハ形し

嵯峨大師佛　九日より十五日こもる狂言アリ

勅願會　十五日　勅願院八二条の北壬生の西

今の雀の踊甚跡也壬生四人

二条大宮の西まううさる

磨會　十八日　淺草祭　十八日　三社権現森武州金龍山浅草寺本堂東推古天皇三十六年宮戸川その時水揚ありて二人の漁師網を擲て紀音の像を得さりこ子卓して後ろ孫三社を建て三神と成今の三社明神也此日餐を夢ると色と餐市とのふ功唐

御身拭　十九日　釈迦堂為五菫山清涼寺本堂紀事曰此日南身拭法人拜集して開帳あり寺僧各白巾を以て仏像を拭ふ

御影供　廿日　弘法大師忌　仁和寺

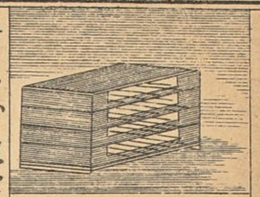
宮雄女詣　廿日　仁和寛平法皇之御菴室跡也故ニ称御室　宮雄ハ釈書

四天長二年勅以高尾神願寺賜空海改名神護國祚真言寺

順峯入　雍州府志曰往昔慕役行者入峯路毎年自熊野入葛城大峯出吉野是謂順峯入自吉野山

字去多

三句去　い色今出入言幾　は花原張果晴　ほ外程　へ途径　と時所遠問共留止通外取解　ち路散近　を音小折抻　わ我忘分渡別侘　か川風　よ夜吉　た立誰度為絶　そ袖初外添其　つ月次ノ遠着付結就次露津　ね音な中啼鳴波



入夫峯法華経を謂
逆峯入逆峯入八秋く

踊念佛

毎歳彼岸の中日三摂あ四天王寺
会仏者まて法事あり天乳の名
号とて廿八座の画像を掲て念仏
供物あり大和河内の乃信者参て参詣

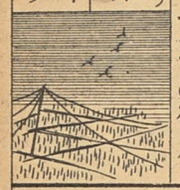
着し紙に絵を付てあ木杓こく也踊るあ有り
一人石丸こ念仏してきこえ不感ま絶て踊ごとく
見ゆるを
いふ

時宗踊念佛

又宗橋の西ま影堂
あ年二年の彼岸ま
号を行ふ是又法音をきて
歓喜踊躍の意あり

硯取

三月三日汐干の杉土佐國西方の岬
海底より硯石を取るなり



貝寄

難波の浦ま
吹風を
いふ

初雷

汐干

貝拾

朧月

彌生山

京徳の
名所あ

初花

春の山と
いふなり

接木

盤砧

春分前後を接木
の法
とも

梅花

三月代
梅い野廣
べて四廣三月の
り故不新廣の
あり

梅の花は
梅入ぬ
木まとも
鶯の
ごと三月乃都こ入るまよりて其意拙とあ

三句ツヽクモノハ三句去五句ツヽクモノハ五句去トすべ
覺よきあり

付句とふ踊拍打越と踊

いとけあ紀こ者の字 葉こ詞 戸こ 戸ハ戸 かやうま俳名不書れ
さるハ打越ま可踊ま句ト
木賊こ木の 春日ま者の 橋こ花の たそかれこ夕ま夕歌ま夕
人こ 田こいあり 空こ 空也 月あるこの月こ 月星不踊月ま
この月とハ年月長
月ま月ま月あるとあり 筑紫こ むき 成こ也 難波 波 ま
南の字 山の字 黒雲こ 雲 月 月こ 月の字 月 月 月

ああり 苗代 苗代

葉黄 胡頽子種類あり一種春月苗を種けばよく育りて実熟せず小春のこときことのを苗代胡頽子と名づく

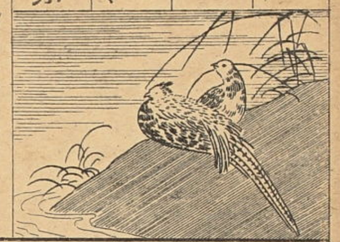
種井 種浸 種ふ

せる 古用中春月を擇て農民四穀の種を水田に浸せ種井に種を漬るの井をいふ

種蒔 麻 苣 其他

蕨 早蕨 紫蕨 鎧蕨

物蒔 杉菜 松菜 蒲公英



鼓叶 金簪叶

虎杖 さゝほま

蕣 花 三線叶

蓮 蒜 胡葱

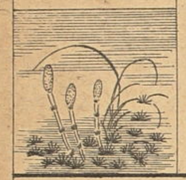
著 葱 韮 水葱摘 菜の花

大根花 蕗 鬘草 土筆三月すぎ麦の系

土筆 髪を結び髪を組乃ま沖をあす

量 莉 菊苗 分る

草かうい し 逆摘



しびこ 流の字 老の字 関こ 筆白 山茶 まゝ 巴色

付句を嫌ふ物

いづくふ 何の字 花こ 春更よ 地こ 花ハふ 煙 草こ 宮殿地 五對月上 紅葉こ 龍田 月上

月こ 更科 月上 鼻こ 匂ふ 臭こ 匂ふ 早ぬ たとる みまふ

むつまし こ 法き 格 朝こ 舟 あけぶの こ 明ける

山類さま〳〵 ひり十ヲ知るの語をなも少べ

二句去の物

いまびりと 稲 僧こ 生る 放生こ 生類 入相 入の字 入れの字

今こ 七日 今ハ 三句去 色こ 染色 色と 〳〵 三句去 いさよふ ふ たよふ 逝きと 字大方此格也

謀 はかりごと ふ もとふ 拂こ 祓 星こ 月日 紅彩こ 朱丹 赤き色 名居こ 名の字 華表 とも 出へし

戸こ 上戸 下戸 ちまこ 逆の字 後の字 中風こ 風

知音こ 去る 春こ ひこ 去 ちとる 生こ 音 鐘 ひゝきこ 去 おや

顧こ かへる ふ かゝみ 見る ふ 形 ふ 眉途こ 出 影 景 陰 此 カゲ

ふ は 二句去 影と 〳〵 三句去 影の字 八月日の影人の影 月の動く影 陰 八 陰本 陰 月のもゝ 〳〵 ぬ 陰 あり 景 八 晩 京 夕 けぶ と の 景 也

ゝり 初こ ゝり お かゝ 〳〵 ふ こ 色 ふ む 語の字 かゞ ど こ 火 風こ

風呂 風 ロ 風 鈴 玉こ ゝ まさ ゝ たま 〳〵 陰 る 月の 初 ゐ ま ひ ひ かけ ゝ る 白 ハ

二句 嫌 ふ 景 月 ハ 考 ふ ん 得 面 き ち と ふ り

艸の若葉　蔦若葉　田畑

野山焼　末黒の薄　布雅曰薄い

草聚り生ヲ曰簿　一説ニ春の野の焼たる跡より生ずる墨黑の略ス

荒焼原　雅語抄曰荻の初生る墨き芽ゆり焼とふ

又荻のもくろとも云

若緑　若緑　茅艸

木の芽　松の花

引鶴　引鴨　雑子　雛

雲雀　鳥の巣　古巣

鷹化成鳩　鳴鳥狩

閑古鳥　泊山　朝鶯　鈴子さし

継尾　日尾　泊山とい山麓より出て宵ニ雑子の鳴砂を閑金て未明ハ行て鷹に雑子を捕きくをいふ　鳴鳥狩　閑古鳥の鳥鶯の鳥　鈴子さしとい　花の咲ゆゑ　鈴子をさすなり　継尾い春鶯の入山へ帰らんるを呼ぶ　鶯の尾ハ鶯の羽の君ちゝきと云羽を後ていまゝ雪の降たるやうに見せ　帰雁　名残惜しい四へ帰るんを惜るとこ

薪に木　焼香ハ火　空に井天　外にわり　聳物に松

草水ハ　との畑　そよゝに風　枇うつ　うち寄　孫ゐぬる筈に

起る　さもる　若木に月次　中にうち　世のあるも　中に内裏ハ付ても不苦

煙に中　村こもる　野に原に　野山原石原　野ゆ　野の

暴風　古松へ　野山の色　付に桂　翁に老　親に子孫　外のもハ

ゆゝきに　ゆゝきに　くゝ知に　かきくゝ　くゝ

ぐゝ　松の色　松のもきゝ　風休　窓に戸　眉にまゆ

まゆに似の　舞にまゐる　茄の　夕に暁日

煙　松竹柳水草の似せ物の煙ハ雲霧霞　雪笹の煙ハ折越を煙付白ハ不種

古の字　いまし

舟に筏　雪去打越ハ橋ル　車用挑あるべし　草に墨跡絵　書物　ふり鼓に振の字

古かしし　木の字木ハ　木の字　楫に木の字　流に言の字　比

杉時　日しまるまる　月ひゝ　雪に雪去　試　木の字　志笹に心　ふにたき

曉に鶏時ゆ　夕時ゆ　細代に生類　軟顔に軟の字　軟の字　あゝに石と

間　ま木き　ま木の字　足に足袋　猿に庚申　指の字　日のさしハ内を　きれ字　雪去

岐阻に木　夕の字に朔の色　ゆうけに夕　月に月ごと

ひこゝのり　市雪に行の字　耳に少　道に菱形　意形

今ハの　雁風呂（まきぶしの事季ノ心）　松虫　虫

木啄　鶺鴒　雀子（孕雀）　鳧

孕鹿（孕ノ字角）

蝶（胡蝶）　蜂（蜂巣　密蜂　蜂蜜）

蛙　田螺　蛇（蛇を出る）

地虫の類穴を出　蟄　寄居虫

馬刀　諸子魚（生江湖中類鮠而形似鯖）　鮡

火（火の字　火の字とハ山焼　松明　薪やく　日　月並の月　毒日　毒の日　永き日　よき日　吉日　凶日　孫日　吉日　祝の日　仏の日　日数を指ふあと　月次の月　前と出ス月　月次の日　四月）　扇風（風引とひく　木引　琴　牛車　如此書きハ二句去）　惚（物の字　うきのよ）　物くさ　初

栖（住の字）　眉（眉ハ二字　墨衣）　ちくさ　いまきる　井川（いろく　いろ　いろ　二字　二句去）　いろこ　ちる　意氏　てふあと　濁り　濁りうる　因幡の俗名　早ぬ

とく　不のぬり　ぬ　ぬるこ　ぬるの

てるそ　ぬる　ぬりあと　ぬ　因

三句去

川　井　井内の里　井　とく（ハ五句去）　たま　松虫（松とく（ハ

井こ　あきハ　ぬ　ぬ　ぬ

こうしてあそぶるまく庫の天宝年中の宮女
宴会の比鞦韆乃戯をあし笑ひ楽しくなるを帝
は仙の戯をとのくまつり
天宝造事あり

八十八夜

此時農民種を播の
節とせ立春より起算して八十八日目之仮暦五
月一日或ハ二日に当る志のるふ見を春事のと事せ
ものハ立夏の節ハ五月五日或ハ六日まるる紀春
の彩内ふ入るる諺を付さるものといふ風し

擬階奏

七日 列見の時 城選の短冊を式兵二
者よりとそまるを大臣奏そ

神武天皇祭

二日

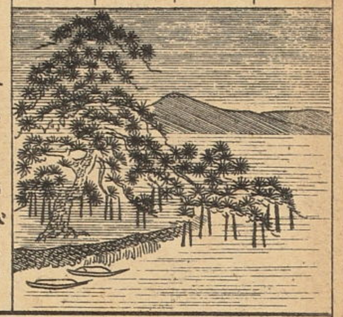
筑紫祭

一日
迫江国坂田郡筑紫ノ在 ほくまの明神の祭
あれ是ら男の数和と渦を載きて女乃波

料紙 杉原紙の子あとの紙に五句を残とくハ杉を煙 羨 泪
煙 枕 紅 孤 松
月 あのくい

七句去

岩ほくぐに 岩茸 花に 樹 芝の香 袖の移り香
檜に階 似物の類 雪ホ外の芝の雪のあれ 年とくより
隙家に家 むニャウラク たくに薫 外面に面
閨にねる 室の中 長きの字 離に垣



多軍之 住吉神祭 初神自摂 神住吉 大神祭 神日 大和国城上郡 三峰神社寺
稲荷祭 二神ノ日 稲荷社在 山城国王城之 山科祭 上巳ノ日 山城ノ国 宇治勧吾寺
緊二里之地
八瀬祭 上辰ノ日 八王子権現天満宮社ノ 祭記之 山城国矢脊ノ里
平野祭 十日 在北野天神ノ西野 江州八幡祭

懸もに 火燵に火 寺に堂 坊 吸物に 吸物に 人の生に 百長の所 雪に 三そ見 霜
行末に 行南 都に 大宮紫中 大内 法に 月の出 百歳あど 匂ふ
面を 煙ふ 紅葉に 一紫葉 木の紫 面を煙

面を煙

岩に 岩ほくぐ 家の風に 家の子 漁火に 火
檜に 宮殿 音の 小雪 村雪 戸八に 戸まぐ
茶に 茶髪 苔に 苔茶 木の紫 根芋に 芋刀

中の卯の日 蒲生郡八幡村 多賀祭 二月午日 近江國大上村

堅田祭 祭日未詳 江州堅田

千安天神祭 午ノ日 江州

和州禅林寺号當麻寺 當宗祭 上ノ酉日山城國葛城郡

地洲郡江辺庄 杜本祭 上ノ申日

河内国安宿郡 松尾祭 二日 山城国葛城郡

當麻祭 上ノ申日

神に 神乎 神を

空 八ゑ姫天まざるべし

壽 ながけ 内義 奥様

たまゝ 玉に 統治

岩根 根木の根あど 岩石を面を嶋

宿 やとり

著 ちよゝ

壁原に 壁べ おかも 拝殿 礼拝

撿校 めくら

文に 文書

重すに 多とゝの毒

歟とゝの声

小雷鳴に 槍ゝり

寺に 南禅寺 東福寺あど

細 細代

扇に うちわ

人の 多数 さひゝきつき

行人に 行ひ

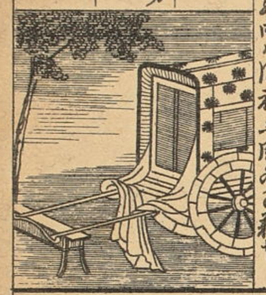
禁中に 大内 宮中

金に 金屏 金紙 金屏風 打金 金箔 金銀 こがね きんよ

志わゝきに 目の志 まなひ

志きゝまの道に 雷ゝ

梅宮祭 三月申日 山城国葛郡 大津祭 一日より晦日 日枝神社山王祭 申ノ日本坂本、神を帰し後 在四宮神社江州大津 山崎日使 三日 山城国山崎八幡宮 水屋祭 南都水屋川 廣瀬 彩田祭 四日 此社大和に有 廣瀬の大忌神彩田の風神之風の雅也



除き疫年 灌佛 八日 仏生会 龍華会 仏の誕生日 甘茶 五香水 花御堂

戒壇堂開帳 八日

ろろきに 志ハしに 将棋に 碁 光 日月 雷電 目の彩 神仏あど

志ゝきに 志ゝぬ 志ゝきに 志ゝぬ 志ゝきに 志ゝぬ

らしあゝんあどの曲り 此歌に三地あゝし曲り あゝんと曲りあゝ志ゝてゆふ七日去

折を嗅

古に 大古 上古あど

岩に 巖 鼻に 鼻かゝ 地に 地ぬき

西に 西方 星に 星仏 仏に 仏法 帽子に 帽ぼし

遠ゝに 遠ゝこちかやうの初い目を苗ゆへ打を嗅へ遠のあるあ 人あき遠の字 皆二句ちゝて句俗とよりてハ付句も あ嗅遠とゝハ三句去のゆゝし

神に 神代 力志ゝき 熊歌 遊生に

花摘 八日 戒壇堂ハ比叡山也 此日法人来坂和歌摘の社を詣ぬ

を花摘とりつゝ 山崎祭 八日 山崎天王 地主祭 八日 山城国

練供養 十四日 和州当麻寺 伊勢神

衣祭 十四日 麻績連といふ氏人をして去年作る所の麻をもりて敷絶美衣を織て神宮に奉く

高野花供 廿日 平家物語に建暦三曰むらしえんぎの内的に蓮花ありて云ハく色の内衣を第〳〵せ除ふ勅使中納言すけすゑ〻と云〻〻冊山玄亀院の住持代に生るゝ所の内衣を奉る是を花供とつゝハ金堂

涉芽生 平生の世 述懐の世 尺戈の世等 平生の世とハ南世世上なり述懐の世とハ深世をもく花摘るなり尺戈の世とハ後世仏事世なり

玉の緒に金 占に うゝゝゝ止うゝ 連歌に多 馬に 初

うゝみに遺恨を 裏枯に枯草 歯折をうゝて二之

鞠に鞠 第る非仏に かゝりて 糸に非ず 傾城に遊女

筆硯 墨硯 塚の字 面に百〻円 ねハ打を鞭 鞭 馬責に かゝりて

武士に武者武士 東に東路 都に京洛 志うとに ちうとめ

蝉に蝉 身を捨る 世を捨る 捨の切 蓑に蓑毫 菅笠に菅養

まて学倍方の僧茶師等を引ひ花を供せ日の日と大師の内衣をこの申る日と同日の如し

千回子 十六日 鬼子母神に一千子あるを以て祭る不一千の数を供せるの意なりて

子を乞ふ者とゝつゝり 日光祭 十七 下野天王 今ハ六月一日 河内郡 和歌祭

十七日 紀州 和歌山 菅宮祭 中ノ酉日 近江天王 野洲郡

久世祭 中ノ巳日 山城天王 乙訓郡 向日明神

上ノ辰日 山城天王 乙訓郡 山王祭 中ノ申日 日枝神社 近江天王

磯賀郡坂本村 国祭 中ノ酉日 山城天王 愛宕郡 関白

加茂詣 中ノ酉日　天祿二年九月廿六日摂政太政連
徒公賀茂詣の事ハ是摂政の
人賀茂詣のもしらめ

賀茂祭 中ノ酉日　葵祭
忌さき

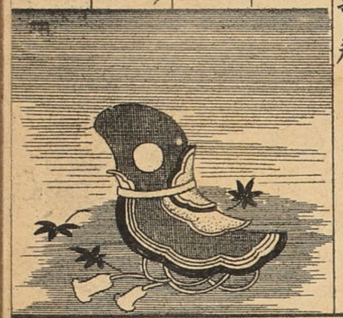
御形日 葵桂 諸蔓 秋明王の御字ハ
神とうさき　此祭まします

の御祖上賀茂の別雷二の神のあ人この御祖ぞ
玉依姫と申賀茂の建角身命のむすめ

古い閑白詣の南日音楽あり祭の当日社司葵
蔓並桂枝を禁裏仙洞及高貴の家に献じ則
御簾に懸く賀茂の地人悉く門戸に挿く志ある
也也夏天霹靂の災あ〜といふ祭日貴家の
人名葵蔓を衣領に懸らる賀茂の地人者是を
頭髪に挿む今日葵蔓桂枝是を諸蔓と称也

又南生玉依姫の御霊 命を産玉ふの日といふ　二枝祭 祭日未詳
大和玉添上郡 車川祭也云　中山祭 二ノ酉日 西京三条猪熊
嵯峨祭 中ノ酉日 丹波玉桑田郡　吉田祭

十八日 山城玉 土塔会
十五日 摂州 四天王寺 別霜
忘草 桜衣 西白
裏表或ハ裏蒲萄葉
或ハ裏赤花



祝ふ物なる等ハ起るさむらのと古代二句去
あ〜五句七句も去面〜たふる物ハおさあ
りあといふ句又酒のさむるあつさのさむる事
さめてあといふ詞あどふ蟹といへと帝上家百
の書ハ作す面〜一切のさし句体とする
ゆえ一説を論ずべし
去蟹ハ第句の詞の神句をよく見定む面し
あつまゆのまゑのあまりのあまそ〜記とする方の

詞ととりて来る句ハ在所ハ也ふりあるも
蟹ふまし〜といふ人〜したとへハあつまゑハ
うふやう有るあまそ〜記といふ句あ〜ハ
在所ハ蟹ゆえうゑ作物ハ蟹〜し今蟹
面を見そ〜ひとる句あるゆ忘るそ〜きハ
正句乃神ゆそあつまゑのようなふやうあるハ正
喰の用ゑさ地と是皆の類沖る老練の上ハとふ
かく先ハ第こ〜ふぬく去蟹〜のきこ

山吹衣 西蕗杉菜 裏黄

躑躅衣 西蘇芳 裏石打

欠餅 煙塞火燵

囲炉裏 名物 上り簗

小鉛 天鵞絨 ととし鉛

躑躅岩はじ 祥はたじ 咋つじじ 岡はこじ きり鳴 映山紅

藤 表波

通草花 水通

糊米 小米花

笑靨花 花細カニンテ笑ノ如シ花ノ頭少クケ

ミ故ニ笑靨花ト名ツクトイヘリ

小粉団花 小手毬

連翹 山吹

棣常花 醼醼 内筆ニ云歓冬とつふの蕗

歓冬

夜ハ日本のあやまりなりきとも上代より

の歌ちのきバ今夏あくるめすして粉くあり

吹合のとき蕗ハ歓冬付て

めくらしかくもとくり

宮蘭菊 裏葉

仙蓋萩 春葉

花 東菊

九輪草 金風

一説折時の云言同し心ヨ通ル時ハ五ヨ二句

去とおもふヨ著くるハ俗会ハ相応ふ故ニ

句のあるヨ花の咲時動の咲折ヨといふ句の

事ヨて平句簗の祝詞ヨよりて斟酌ヨ

き相之ヨてかゆうの類ハ一座の宗匠ヨ

任ヨべし

和ヨものひしーヨとの去嫌の程ヨあるヨをよ

く弁ふ至したとへハ

松をあるよりみ位ヨとつ加

あとといふ句ヨハ旅のぞんき侘風の類

宗去之

風のあるようをたまきろあ

あとといふ句ヨハ旅の侘宜ヨよりもを

折を嫌ふ

生句のあとときハ折を嫌ふをきひーきやうなと

とも前のたよりと塔のたよりとおのづから

花　丁子草　華鬘　母子草　蘭麹　馬藺　萍生　沉丁花　芸香　長春　月季花　緋絲花　金瞿子　野薔薇　皆薔薇之形也　茅花　化瑜　金盞花　桃草　五形　卒米薺　青麥　奈毛美　蓑竹　餘蒔大根　江陰懸志曰蘆菔ノ一種暮春時有ル之形細長名曰楊

を信ずるあり日々の義ハ生てほそく度の六ふ五の
さてぐ行よあるあり是此俗りとつふ字ハ一種
二ふ引ンとなりよりて一ツと四の物まて引んとす
よりハ形ハ面ハ煙ひしとなるなり
去聲ハ生てほそく因しつて重ひを制するの法
式之なりよりてなりきとも因言よるるハ煙ひ
今を一二を舉ぐ例名ハ去と黄ハ面を煙ひ古筆
古歌或ハ物ることなるとは句よりて黄ハ二句

花蘆菔　萩若葉　初さくら

桜　八重桜　普賢象　楊貴妃　虎ノ尾　塩竈　緋桜　糸桜　遅桜　焼桜　此花繁英ふ〜そ枝上きゆ〜ふきのめ〜し老樹の歯落て蔕のなし　柔與蔕　和州初通ハ知ふ名づく　児桜　小白単　柔即ち山桜の一種之一説ハ総て小桜の影を呼て児桜と称ス別種あるふあ〜ス　熊桜　彼岸桜ハ先立て八重の白花を開く桜の先登之花の色白うして少くあと茎うち

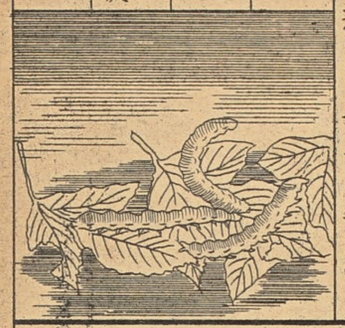
去之又重と重ハ同字なれとも八重九重あるとハ石の重紀なるハ同字の別吟なて付句も煙ひたる重を重ねるこ句去重と重て七句去八重といふハ幾重一重なるとを面を煙ひ八重葉ハ八重塊なるとハ折を煙ひ少しめし数多のみ生ハ此格之拳てうそかるとしなるとも一説ハ
花軍嘩呻を懐ふ〜て拳をとる付を制
なく例なるとみるハ穿鑿の論婦ハ歳ぬ〜し是を

むゝー添平の名殘ゝ橋ゝ一の名まて先繁せし
名まゝゝまりとゝいふ平樹ゝゝゝゝ日女天まる芭

山橋 一寸の一種丸ゝ橋ゝ草とゝて寸とゝ加
ゝゝゝ橋と称ゝゝゝゝ平の橋なり

花

花簪 花日和 花曇 花の雪 花の香
花吹雪 花の波 花の面 花ち 花綿
花潮 花の鈴 花名
花笑顔 花の姿 花唇
花房 花ひゝ 花の袂
花の夏 花の扉 花の花
花ん 心の花 洞の花
花衣 花の袖 花の秋
花くゝ 花四 花桶
花生 花入 花筒



花瓶 花車 花の車 花笠 花筏
花傘 花簪 花盃 花造 花ごゝゝ
花の踊 花の夢 花軍 花廷 花ゝ
花の孫 花のあし 花ひら 花の子
花畑 花幕 花よめ 花聟 花ま
橋人 橋ゝ さくゝ

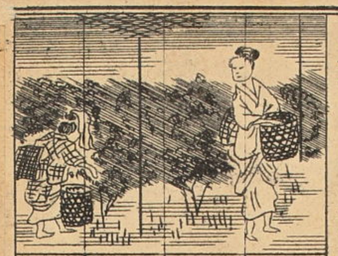
海棠(カイダウ) 睡花 李花(スモノ) 杏花(アンズノ) 林(リン)
檜花(コノ) 楊梅花(ユヅラノ) 梨花(ナシノ) 棠(ヤヤ)
梨(ナシ) 山梨 棗花(ナツメノ) 小梅花 石榴(シヤクナギ)
花 蘋婆花(ズハウノ) 楊梅花(ヤマモノ) 馬(ア)

ちりて拾拾のさきき ゝゝを上ゝの家匠と
いひ杜撰ゝゝゝゝゝゝゝゝゝの家匠といふへし」
歌よ題を所ハ古式をゝきをゝゝゝゝ挙ゝゝゝ
されと歌仙ハ呂三十六句之三十六句之ハ別の
句ゝゝゝゝゝゝも容易ゝゝゝゝしよりて何ゝゝゝも一句
ゝゝゝハ糸ハ達意有のよき也

百負 茅宮 七十二候 源氏 五十負
四十四世吉ト支 孫仙

まゝゝゝゝゝゝ延延ゝまり五きハ百韻の
ゝゝハ歌仙を挙る

表八句 月七句め 裏十四句 月九句め 十三句め花 二ノ表十四句 十三句め花
二ノ裏十四句 月九句め 十三句め花 三ノ表 二ノ表裏ニ同
名残表 三ノ表ニ同 名残裏八句 七句め花
表六句 月五句め 裏十二句 月七句め 十三句め花 名残表
月十五句め 同裏 花十五句め
孫仙ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



醉木花　木瓜花　木蓮華

辛夷　檜皮　枸杞

五加木　柳絮　新藁　搗藁

摘　雲の多ゆたかなる国

嘘ふるる　麦　鶉

月令広義　季春之月　田鼠化鳩

鰍　搗魚　搗貝

連歌ハ　ものこゝろ　ハ　ちかよりて　まこと

解　アナニエヤ　の　ほかの　ものも　言侍

侍　ものと　連歌　花の　ものも　あるよ　ものさこ　ゑ

けものハ　こゝろ　ハ　華

連歌ニ云

歌仙　こゝろ　三十六句中書の書法

折目四ツ　面と　裏と　六六と　認る　去歌

ものハ　得あり　世　ものより　落と　いひ侍

搗貝と　称する　ものハ　俗も　搗花の　地ハ

しゝ　ごとゝ　ときを　いふ　宝　ハ　ハの　辛ハ

伊勢の海の波のまよるさゝ貝

ひあり浦のまつの色こまも

搗鮒　柳絮　鷹蜘　鷹飼　鷹棚

鷹巣　巣鷹　人多ハ　育つる

こゝもども　古くなり

世よちう　せんのむくさの　花の種　兼載

全巻　侍ら　をもへ

ものを　神とし　て　代を　彫　仙のもしめ　と

多句　名　寿　ハ　赤の　ま　ハ　天満宮の　名号　或ハ　畫

像ヲ　勧　画　しし　たの　うち　名号ヲ　主く　敬し　画像ヲ

ゝと　て　海　画の　像ヲ　又　生　ゝと　ハ　其　ヲ　香炉　花

純　立　花ハ　四季　ものと　も　梅の　枝を　ものし　ふ　画し　淡東

ものを菓子といふといつて

郭公巣（ホトトギス）

郭公巣を受むること能はざる

鶯の古巣を借て卵を生ず

鶉巣（ウツラ）　鳶巣（トビ）

呼子鳥（ヨブコドリ）

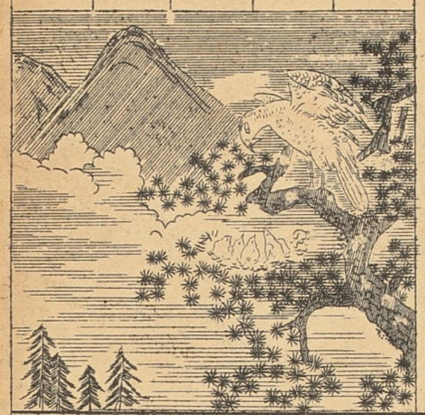
白今三月の時と言伝へ

これハ変よ

ふレ拳

殘花

引鶴



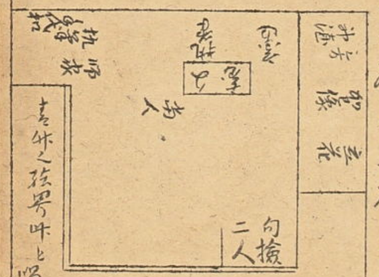
市酒を備へ小百負ものを式もこの如くなれども殘忌其角忌又ハ先祖追福ゝ俳諧ばかりを式肩し

南白宗匠と執筆ハその席の上座ニ居り和歌の講師の如し

相吟の句案座の図

その坐敷の様子ハ

より思ひ合へし



ひとてさしの部

春湊（ノミナト）　夏近（ナツチカキ）　夏待（マツ）　暮春

行春（ハルノカギリ）　春惜（ヲシム）　春こおく

春の名殘（ナゴリ）　春ゆき

春過て（スギ）　春ゆくすえ　春ゆくのち

五月

初夏　孟夏　花殘月

執筆（シヒツ）の事

先ず基（ブンダイ）を拵出（モチイデ）懐紙（クワイシ）四枚を二枚ツヽ重（カサネ）て二ツに折横（ヨリ）二ツ折て又竪（ヨコ）を三ツに折（スベリ）机の蓋（フタ）の上に置ず基の央（ナカバ）に置へしさて宗匠は一礼（イチレイ）して文箱に向ひ硯を右に残二重目に又基の上に硯の蓋（ワガワキ）を敷（オイ）て残一重蓋に置一重ヲ上二枚重の端に書へし夏（ナツ）と記て出座ふ所に持て出座ハ百談の法に倣仙懐紙二枚表に六句裏十二句出座他附句の清書浸し懐紙（ギンセイ）吟（シュウギン）懐紙（ウキ）小祝吟（シュウギン）懐紙の端に師（シ）まつ筆を取座

正陽月　仲呂　卯月

立夏　五月六日　小満節　廿一日　和

清天　孟夏の旬　年中行事歌合曰

初鰹はつかつを酒をさまひ改をきこしめ
はんの旬とハすつるきの改まのそと詠ふ　供ス

氷　ヒヤ　ヒヤ　ヒヤ　ヒヤ　ヒヤ　ヒヤ　ヒヤ　ヒヤ　ヒヤ　ヒヤ

賑給　貧窮の民に米塩を与ふ　献菖蒲

菖蒲の輿

菖蒲を以て様とす　細布を以て

端午

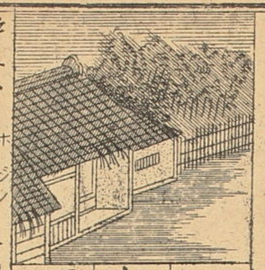
柏とはの小殿の形を造り禁裏に献ず

艾虎　艾を以て虎の形をつくる

艾人　艾を挿して人をつくる

戸口に懸く　蒲人　菖蒲を以て人を造る

皆形象を造るなり　天師を



年号月日

俳諧之連歌

文字改

月

年号月日のうち
支干八書ぬ例し
芭蕉はて八賦ものう
ものうとき時ハ
師傅ハ文て
為

私の家にて
たてまつる
かりうも其角
海月る　一句
書　孤屋

句のうちから
字並に文字
仮名交へ
墨汁もらまきの如く
形
墨のたかとい
口傳

年号月日の下に
題詠者を書し
迫善おもハ第
表とす

ちまき 上ニ同シ **粽** 流粽 芦粽 飾粽 笹粽

飾冑 削掛冑 **菖蒲刀**

幟 竹のぼり **菖蒲髪** **菖蒲湯** **菖蒲酒** **菖蒲浴衣** 端午に着る

菖蒲湯 菖蒲を以て湯を沸す

菖蒲酒 菖蒲を以て酒を浸す

菖蒲浴衣 端午に着る

蓬 端午蓬を以て屋根を葺くと菖蒲のめし

蓬 端午蓬を以て屋根を葺くと菖蒲のめし

棟 山井水俊人樗を

佩 田舎ハ端午に樗を

抹蓬 樗を刻みふくべ作り

藥玉 五彩絲

長命縷 諸病必五日ニおこるゆえ五彩絲を五色の色にて祝てひぢより人ニ

悪鬼をもふせぐ

藥日 五月五日をいふ

藥草搗

鬪百草 端午に色くの草をあつめて搗負をあらそふ

菖蒲の生草 菖蒲の日 ひをりの日

菖蒲の生草ハ六月六日迄の間てつのひとのごとく書ひも引しさまなり生草ハ菖ひ三日

千句一万句十百負

十百負と千句とハ俳諧ハ千句ハ一座に十百負ハ十座より集て去嫌なる用捨有事なり

淀川油糟ゆとゆるもその例く

千句ハ發句十句也賦物アリ春二巻 夏二巻 秋三巻 冬二巻 三月満尾 七くし 初日三巻 二日め四巻 三日め三巻 是本式し

獨吟の句ハ一百満尾の定也

千句奥の時表句影の次第ハ巻所と疑ひの句

俳諧ハ式目を乱きおかるゝハ和漢のぬく去嫌くし

漢ハ秀逸述懐抒回文連歌のぬく嫌とゝきく

俳諧式目十首哥

あるを以て此日近衛の陣多褐の屋を引折て着る流ひさりの日といふ　彩團を射る　端午に彩團子を作りて金盤中に置くに角弓を以て是を射あてゝ既ることあり

競渡　竟車　水引　印地打

去鳩　鶴舌　鶴之　桃印符　赤靈符

端午日鶴より蒙文の符を出て惡氣をやむるといへり

神弓　端午の時に百日八竹の節の中必ず神あり

六日の菖蒲　屋根に菖蒲を葺く

六日に菖蒲湯に入る

菖の美　菖の美の物の事　端午に菖の美を百度に編ハるゝ漢史にあり

賀茂競足揚　一日競馬の試

賀茂競馬　五日　松本祭　一日　江州大津松本村

藤杜祭　五日　山城國深草山の麓

蘭祭　五日　近江國倉坂山

宇治祭　八日　山城國宇治郡

今宮祭　九日　山城國紫野

宮祭　十三日　播州宮津

西社祭　廿三日　江州下坂本南ハ若宮權現北ハ酒井

大原志　大原の神宮丹波國桑田郡伊弉冊尊之鎮座也

俳諧ハ春の五のろ〳〵こめて七句を六句くハ二句そ水道や又山彩の深用ハ連歌の如くなるべきなり名所玉神淡報恋者迷懐て田面よそせぬ鬼女帰狼のあり引ものの面ものもれと一座一句ぞ物式の一座一句ハ二句是くし句の物をハ三句書くし三句あるものハ四句のもの面をもつて五句ものし形式ものと表を嫌ふもの俳諧ハ七句去べし連歌ハ世ものの名所なるの調ものやきものハ一坐百句

右見師貞徳老人ゝ定也但市人筆ニ俳諧ハ水辺山類共ふ可有物用ゝ沙汰也後学ゝ人の俗所好者ゝ

延寶二年ぬ月十五　季吟

此式目ハ作義仲ハ樓蓑集批口ゝ附ケ侍

一軸之巻ハ為ニ学者ゝ清書

明治新選　俳諧獨歩行　終

聲養を守護し疫ふとて聲餉するもの別て尊敬すると
いふ祭に醴を礒して神を供す故に甘酒祭といふ

祇園神輿洗 六日 御の芝くゝり

青あゝ

短夜 明やすき 晒布 夏行 夏書 夏經 夏花 安居

自四月十六日二夏九旬之間禁足而安居既入謂之結夏既終謂之解夏又自七月十六日至十月十六日謂之自恣 夏行ハ昂ち安居也安居ハ出家修りの時を撰て如に住すあふ安居の間他の化を為ふ勤て三界萬霊に回向等する之一夏九旬とハ十日を旬とし九十日なるゝ故に九旬といふ在家もまた夏ある輩も夏を修し九旬乃間飲食魚肉を斷ち經を讀誦し書写し花を供養す

更衣 白重 一説に絽て白麻に袖て衣ヲ重ねるヲ云 用る寒々ハ小袖を着て是を去ぐかさるを云

御の芝衣 表白裏青 袷

綿抜 夏羽織 羅 禪 帯 新茶 焙炉時 擇茶時 古茶 麦麭 麦麭 麦

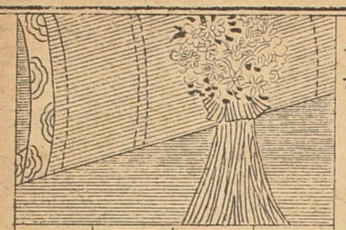
切麦 冷麦 冷汁 麦酒 夏日酒の気味を失ハさる為に麦酒乃法を用ゐ

水鰊 干鱈 平鱈 塩鳥賊

蟹 鰭 初鰹 一夜漬 一夜酒 醴 洗鱸 初茄子 青山椒 子瓜 かゝ瓜 青瓜

瓜 茄子 きゝう瓜 蛇瓜 蚊帳 紙帳 蚊屋 扇子 団扇 懸香 俗小白ひ袋 線香 日傘 鮎

落口等ニて喜秋アリ 魚藻 青蘆 宮中ノ市ニ百ヨリ替ルヲ之 牡丹 深見草 百貴草 廿日草 名古屋 花菖



苟藥 羽離 蜂約 えひすぐさ 杜若 索燕 燕子花 一説子芋葉ともゆ好花とふよ一いつまゝ見るを去ぐ識者ふ居ぬ者〜

罌粟花 菱 のさしぐさ 立葵 二葉葵 山蕎花 茨花 苦竹花 烏扇

風車花 胡蝶花 玉巻花 玉巻蕉 踊花 菜ひき草

石蘭 羊躑躅花 白丁花 紫羅傘 蓍尾 燕子花の類 にゝて花早く咲く 雁瓜

天夢花 花梅花ニ似タリ 反梅トヨム　繡毬花 覆盆子 蓬蘂 覆盆子 蘆蘂 樹蘂 美人艸 罌粟小類也 花艶也

宝鐸花 蕙 白及 蕙蘭　石蒜花 悠心艸　菌花 雪片草 虎耳草　玉孫花　篠子 篠笋

筍 菅蘆 蓮の浮葉 蓮波恵 蓮也　綿蒔 麦苗 麦秋　馬歯苋

苅薑 苦艸 蕗 蕗 蕗　藜 根芹 須伊米　蓴菜 ぬなわ　海松 海藻干

葉柿 餘花 反まく殊るを花のすゑ反木立の若葉の花ハ餘花と同しかるべしと年浪茶ろ

いへり 青葉の花同じ　若葉 新樹 夏来立 末艸花 楊ノ実

本下草 わくら葉 若葉と書反山ハ紅葉のたとへ赤くなり又枯なるも白くも黄ともあるを云　原朴花

和の花 案 桐ノ花 櫻桃花 芙楓 柑類ノ花 反柑 枳穀

乳柑 密柑 柚 佛手柑　蘆橘 岩梨 藪椿 栗楊 芎 盤木ノ蕗 蕗ハ四時

凋まきろ花類花を落葉をトヨム　老蕾 剤葡ノ蕾 食剤 より蕾 時鳥 杜鵑 杜宇 子規

胃縄 郭公 閑古鳥 蛾蟻 枝撓る性 蟹蛹 原蟹 晩蟹 二番蟹

蚕簿 蚕を養ふ器ノ 蜘ノ子 蝶 蛞 生節 鹿ノ式角 蟋ノ子

蟹の類也 津波須 小物也 才子 蚋 蝿 螟 蛭 蚊 故蚊 ちまとり

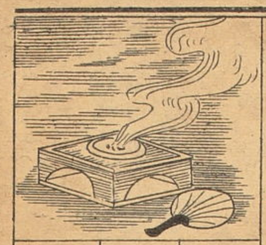
蚯蚓出 蚰蜒 百足 蝎牛 青鷺 鶴 鶉 鶉 鶉

務き翡翠（カハセミ） 通鴨 音を今者 鷹巣（トヤイリ）樹入 毫を含て入て（コガラス） 子鳥 雀（ニホ）の巣

六月

仲夏 早苗（サナヘ）月 橘（タチバナ）月 皐（サツキ）月 早月 蒭蕘（スウジヒン） 芸種（ウンシユ） 夏至（ゲシ） 廿一日或ハ廿二日

氷室開（ヒムロビラキ） 一名おのの 忌火御飯（インビノゴハン） 一名根源曰内膳司より奉るを大床子の御膳（ゴタイノミウラ） 一日 斎を



ちめたきをトひ九日トひ終て十日氷室を供ス忌火とハ火をいむなり

是ハ主上ノ玉体をうらなひ奏するなり

月次ノ祭 十日 云事 根源曰六月十二月に諸社市幣を

まゐせあふ

神今食（ジンゴジキ） 十一日 云事 根源曰是も年ホ西度伊勢大神宮を勧請中

なり

さきてくゝ天子ふたりこのふ神饌を供ス也終ふと云なり

解斎巾粥（サイノミカユ） 十二日 神今食乃次の

あさ供ス

かはらう 十六日 赤宮会 嘉定紗 一説ハ

かはらうハ赤宮通寛の中略ニ云

増山井云 ハ ハ ハ

鞍馬竹切 二十日 上難波御祓 摂津國大坂 住吉御祓 廿二日 摂津大坂 愛宕千日詣 二十四日

櫛玉祭 二十五日 丹後國與佐郡 天満御祓 廿五日 摂州大坂 住吉御祓 廿九日 賀茂六月祓 三十日 唐

嵯峨 三十日 称三千日詣 住吉御田 御田植 摂津住吉 旧暦五月廿八日あるとも田植を六月の題とあり故これを準ず 此帝

田施八乳母の姓女甲乙めとありて是を勤むといへり 御田植 伊勢山田太神宮の御田植之 太神宮乃祭あるまて神主修行の前あり是を以て四を伸く風情をあら是を伴四庫といふ也の傷りなき謂なるへし是も前と同しく旧向ふ処の柱木撫ぜハ極めて産やすしとセの傷りなき謂なるへし是も前と同しく旧

唐廿八日あるとも 有無日 廿五日 多用にまい行るるも有まりて此名あり 雑祭 三十日

今もなほ

道饗祭 夜神を鎮る の祭 八梅 皐月 梅雨 降り雨 偽こいふ大磯の虎娘の名我乃祐成とは別る涙変してるとある陰暦五月廿八日 皐月闇 黒むへ 白むへかきくらして今も降やうあるを黒むへといひ時んとをさしていふ

田植 田植 早苗 乙女 川狩 田舞 醤油造 酢造

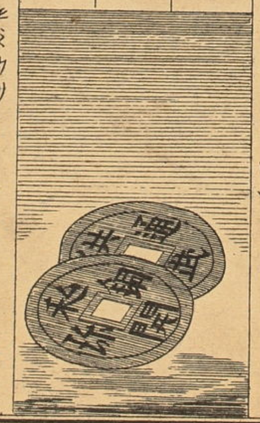
納豆造 味噌造 清酒 泉殿 瀧殿

竹婦人 竹細工 抱茶 瓦師 風磬 帷子 辻ケ花

夏切菜 沖膾 鯖鮓 黄梅 梅漬 搾瓜 割て水をさり醋に和して膳中に入る用也

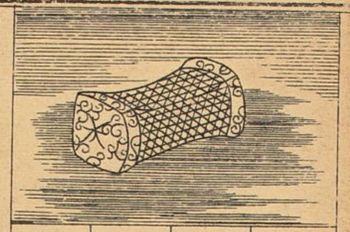
新茶和 花菖蒲 菖蒲奥ふる薦を菖蒲つくるといふ 全盛菖蒲

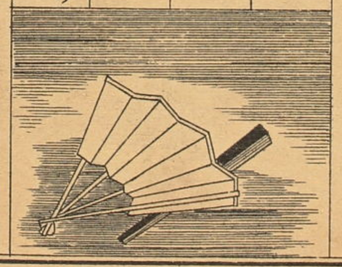
菰刈 菰の花 紅花 紅花摘 赤摘花 杜鵑花 百合 姫百合 車百合



透百合 袂百合 百合
博多百合 姫百合

さゝゆり 紫陽花 七化の花 芸艸 糸芋 小毛花
石蒜 反菊 赤のふ 紹蒸 夏大根 金銀花 金仙花 翁菊
蚊屋釣草 蓮の花 五葉 東央柳 青田 細布蕣
栗 胡广 白瓜 胡瓜 ゴボウ 酢茎 茄子
豌豆 宝豆引 豇豆 大角豆 藤豆 黄蘗隱元来 弘栄 此を うゝまと いつり
海艸 神功皇后之攻異國時舩中無馬秣取海中藻飼馬故名 神馬草神馬藻ヲナノリソトハ神馬ニハノルナカレノ義下學集 若竹 今年竹
樗の花 栗の花 合歓花 南天の花 くちなしの花 葉柳





枇杷 青梅 竹植 唐子 桑の実 早桃 反魂 花松榴
青柚 柿の花 椰子花 梓花 散松葉 羽抜鶏
小鶏 鶉の巣 五倉の巣 鼠糞 蛇腐 蛇衣を脱
鹿の子 五馬 絡蹄 ねり雲雀 雲雀鷹

七月

季夏 風待月 常反月 小望月 林鐘 小暑 大暑 三伏 反魂の中この
庚を初伏とす 天貺節 半夏生 二百二十日 井宗七ウ鞠 七八絶 暑 さらし井

納涼　地花祭　昔香花を御獨ノ石地花と

節折　三十日竹を三寸の俗ことばの寸法を取て甚不とゝ
とハ中ノ　昌杓の命婦竹を丸て多りて苔のぬくゝして古祓を絶侍るナリトカヤ

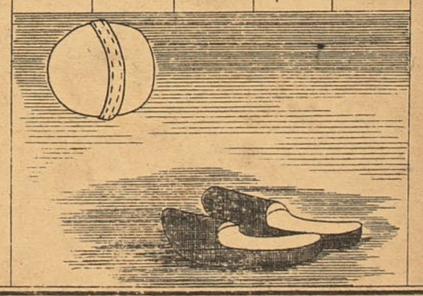
大祓　三十日大解除　祓　祓除　ちる　根源曰百官ことゝ　菅輪　菅要
朱雀門あつまりて祓をし給ふ土月二ことあり　云々

チガヤ　あて調るゆゑ不茅輪といふ菅要も同〳〵彫ひ人出天地
一四相の目をこゝ元夏より秋へうつり疫病をまぬがるゝの道あり

形代　梅物　形代ハ人形之撰あハ人形を梅て川へ　名越ノ祓
流し夢の半ゝ殃を除くあり

神祇令曰名越ノ祓トハ名ハ　麻ノ葉流　祓仲　夏神楽　川祐
夏ノ夢後夏越ノ祓也　祓ける川ま流ゝ

小繩芭神　蟛　蟛　奥儀抄曰サハヘナスト云ヿ蟛ハ夏のハヘノチリミタレタル
ヤウニ惡キ神ノアル由也是をハラヘナコメムトテ祓ハル也



也云ゝ　富士詣　法齊六月一日より廿日まゝ　いふ法齊の功齊七夏の中央りあり
夏ノ夢後夏越ノ祓也　ゝ比を条詣の初とあ尺らいあや其洲の信者不尽ぬべゝ今ゝ富士ノ雪消
を七月の影とゝ尺ゝ　溽暑　暑さ日　夕立　涼風　風薫　風の香　雨乞
もゝ不進ゝるものあり

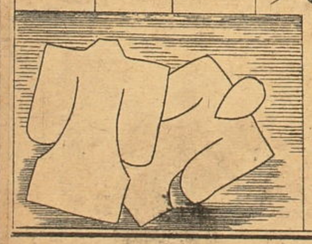
雲の峯　富士の雪消　清水　夏深　鶴亂　土用干　出干　出拂

雨ノ陣　篁　汗　汗拭　心太　炎天

氷麦　氷字也　冰餅　菖蒲　枇杷葉湯

砂糖水　香需散　水飯　洗飯　乾飯　製

梅子　石井　澤潟　蓑の芒　河骨



蒲の穂　竹皮包　午時花　鼠の尾　ほたるの火　竹　玉簾

淺香　蟬草　菜蘇　萄の花　夕顔　豆顔

糸瓜　搖麻　花の様に似麻を苅も皮之二番苅ハ秋之　夜川の菜　夜芋　うつむき　修澄芋　風葉

青葉　青鬼灯　青番椒　綿の花　鉄線花　時計花

盆苅　萩苅　茗荷の子　揚梅　杏　林檎

百日紅　猿すべり　夏虫　夕をこがねとよむハ螢　又蜉蝣をもあり

こがね虫　灯蛾　毛虫　蠅　油虫　取

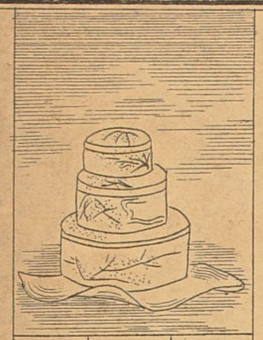
雲雀磨　練雲雀　雲雀毛をくゝる時其形こと迷うなるゆゑ　磨をおちて去るを捕を雲雀磨といふ

夜不浚　夏過　夏の果　秋講　秋待　末の秋

初秋

八月　をミなへし月　菜秋　孟秋　初秋　夫則律

八朔　このむの祝　張行器　後行器八後晴　俄帝　若宮まつおもしませ



比よりとうやもしめハこのことして米を打盛去器よつゝて松緒ゆりのちハ行器
ま菓を入て縛り付ると山の井ハ見えこり今ハ赤それも行ハ生す成ゆこり

七夕　知られひめ　ときりのひ色　はくろ姫　七夕ひめ　ひこぼし
星会　星祭　星の子向　星の契　織女　牛女　めさ形ちこをこふちこ
二ツ星　とり一書　牽牛　銀河　銀漢　銀漢　星河
七夕日和記　天の川　星会の涙　いせ物星の会下ふ形と

年の波り　書むつへ舟　このさてきのもゝ

湿と化まる生あれ　乞巧奠（キツコウテン）　彩の糸　庭のこて琴り　かゝ小袖　乞巧針（キツコウシン）　りろこしよ婦人七ツの針ゝい

ろゝの糸を通して手向ける多之　七筒（ナヽコ）の池　星をあふる水七ツの盥ゝ水を入て鏡を付て星の影をうつ出をいつり

前栽巣時　祈ふ見えとり

梶（カジ）の葉　芋の葉の西瓜　芋の葉の表をとりて星の子尚の歌をりつり

茅巻をもて色この化り物　迷（キヤウ）の宮入（ミヤイリ）　文殊（モンス）　門前（ゼキ）の篭花（カゴハナ）

三宝花燈籠アリ　六道（ロクダウ）の宮入（ミヤイリ）　迎火（ムカヒビ）

六道アリ　六道（ロクダウ）参（マイリ）　九日　迷仏（ケン）ちの南こ有むりゝ鑑々冥途こ通ひ路る所あ

見る聖昊匠こ彩人参りて鐘をつくるあり　桂買（カヒ）

昊も六月こまりて買もてきて

玉祭りをもておきて侍り　清水ちる千日詣　十日　盂蘭盆（ウラボン）　施餓鬼（セガキ）

玉祭　聖昊棚　茄子　瓜　茄子　馬　ま長垣　迎火（ムカヒビ）　墓参り

ゝそ鞍　麻ゝゝ麦　麻ゝゝ箸

生身玉　蓮の仮　さゝ餅　盆灯籠（ボンタウロ）　きりおとろろ　舟とろろ

葉中まも麦少　蘇とろろ　花とろろ　彩とろろ

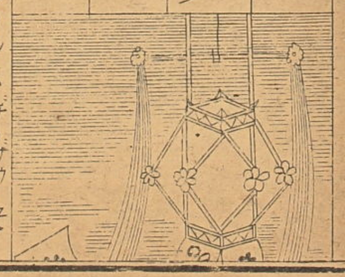
門跡まもり

送火（オクリビ）　十五日夜　十六日まも　盆踊　小西をとり　きそをどり

並をとり　たいりゝへをどり

八幡安居頭（アンゴノトウ）　十五日　ゝゝハ十二月十五日こと山の井まつり

そ出も絶ゝとり　三井寺（ミデラ）女詣　十五日



花火　直来　昼夜ともとり　浪烟ゝ同ゝし　水ゝ汁菓　説こり貞徳云水穀菓八　多盛菓八稲のもん　又　地蔵会（チザウエ）

おゝ行くハ七夕ゝよめり　ゝゝそもきこともいつり

廿四　壬生六地蔵形ゝ人童子の灯篭こそまつり侍り　七夕　玉まつりのるハ宮内のきこゝいもを侍れと

府下ゝハ七月こ行ふるアこ形ゝ多りきれど　都鄙　ことゝある事ハそ是のこゝ坊ゝ侍そハ耕作の時形ゝ

よるものなゝし　今七夕玉まつりを八月の部ゝ加へて秋季のと定めこゝハ俳諧の連句者一の反

具形れハ人是らの類ハ鄙ゝ羽田る和ゝ順て日暦ゝ入れるものも程多し

ささやき祭 ささ山拵も不安化も 山時雨

穂屋作 蕎の穂まで作るくりやくいろつも作るく作法ハ玉ハ那ヨアルベ

相撲

ことり使万葉

辻角力 相撲の秋ま成事ハ初秋のおかやけまえ きき八々の世まも秋ハ用ゆ

雲鶴 うを寄

初嵐 ネまシ ネホしめて

ひゆゝり 爽気

扇おく 園扇おく

霧 雾の雨 雾の色

雾立 雾さえ

稲妻 いなのとの

砂ま暑

木槿 月今ニハ 夜之

茅花 紅顔

女郎花

蘭 ひぐさ

萩

糸ちぎ 小萩 麻呂芋

萩屋

萩の戸

蓋ま乃

芭蕉

小車の花

桔梗 きちかう

犬子草

萩 さゝき萩 ひきき

彼岸の萩

冷麦 ひつま麦

やきこあ

名月 名高き月 芋名月

月々肴 くふの月

彩月

月ばやり

小望月 十日夜

三日月

十六夜の月

こちまちの月 十七夜

居待月 十八夜

ふ待の月 十九夜

香闇 二十日

月弓の宮 日本紀

月のまふね

月の舟 まの月ちえ

月の鏡 満月をえ云

月の兎

玉兎

常娥

月の桂

玉蟾

嫦娥

月の名ハ形ちえ

桂男

月の剣

月の雪

廿日夜中

廿三夜

月の都　盃の影　初汐　いけるを放つ（石清水十五日）　宮彼祭（ツクシ）

及すくく八幡祭る（八月十五日）　駒牽（ヒキ）（豹遠へ望月の駒　青原の駒）

釋奠（セキテン）（先師并十哲の祭　二月ま　十月ま　同　オキマツリト云）　仙翁花（センワウ）

藥師草（夏切草ナリ）　観音草（ヤクモ）　益母草（ヤクモ）　おきな草

菊（ちかうす黄菊の色白　紀青草ニ似て花あり）　やいと花　ほうこさまめ　糸瓜

桃の実　木瓜（ボケ）の実　罌粟（クサギ）の実　槐（エンジュ）の実　早稲（ワセ）（穂のもやもせ　おもゆの中ちりよく）

（うるを　いふ）　ゆる敷　蜷（ヒクラシ）（せみを結ても夕方を　鳴ひても秋く）　秋の扇　秋の蝶　秋の蟬　松むし

鳴虫　蟋蟀（キリギス）　叩頭虫（ヌカヅキ）　地蛄（ケラ）　蛬（ヤンマ）　ほうこ　蛬　いとむし

横蛸　藻に住虫の音ふ吟（我々の雑之　ちくといへい秋）　虫（虫名　むし撰）　えのむし　形く

この虫と斗　八雑し　枕草紙に秋風　吹けば父恋しと形くと云し　い形だ　い形むし　田虫（ヘン）　おろる　鰯

雁（タカ）　雁を　秋る月　合　雁屋（ヤデ）土の雁（タカ）　雁山別（ワカレ）　初雁　初雁

初雁　尾吹（フキ）　山尾ハ秋さろり　ふ　ふけ　人情のまゝを　してを合せて情の色の中ふ　ふ吹　ふ　ま　ふ　ふ

（情をとる　ことあとも　ふ　雁を　元　ことあとも　いへり）

中秋

九月　菓月　仲秋　南呂　重陽宴　重九　菓萸嚢　九い物の数こゝの月九つあれい重九とも重陽ともいふこゝ　菓

壮月　中律

菓子　白きく

十日きくとも　きくうきなのきぬ　水村祭　百百堺　堺天神祭　三〇日

世野祭　冒　白髭の風流　西近江五日　敦賀祭　十日　ほうさ石　十て　云る根源定考をこゝ

菅大臣祭　十六　五条坊門町の西に有紅梅殿とつふ是こゝ　御霊祭　十八日　菓名祭　日　後の彼岸

奥びと穴まゝ　初もみぢ　落紅葉　死活杖の祭　独然の事ハ渦逗社とアリ由ゥし　死死のもの、退居こまつまりと云

秋社　社多の社ハ下ハき戌日こゝ　五こゝの祈を奉るこゝ　龍田姫　社の色を染出す　造化の神こゝ　社の宮　中宮の出るこゝ　但三ヶ月まとこる

芙蓉　木犀の花　蒲萄　えびうゝ　菊　花野　蔦　落ゥつゝ

薄　赤の薄　糸薄　尾花　刈萱　萱ゥ刈場　萱特　壇特花　紫苑　おまの赤こ草　月草

露草　葛　葛ゥ　葛の芋　葛の根塩　草の色付　芝檀　散きこ　風仙花

鶏頭花　繊紅　加まつゥの芋　金剛草　ハ木紅　枕草子こかまつゥの芋ハ木紅と書と云ゥり

こなき　沃桔梗　うづゝ蚊　あけび　菱の芋　稔こゝ　苗香の実

くさのおも　冬瓜　天瓜　玉つさ　牛房虫　芋　もいき　ぬうこ　薬堀　刈安

きこゝこ取　ゆふく　鬼灯　ゆみ貫　うけ貫　冒引菓　つまみ菓　菓種まく

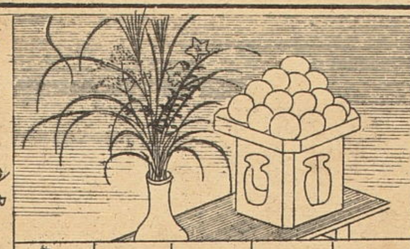
大根種まくけゝまく　うゝしまく　衣うつ　四ようつ　赤ころ打　ひやまき　石　鶉　片うづゝ　ケうつゝ　鶉衣　鶉網

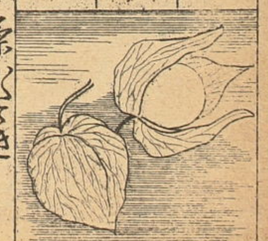
鴫 鴨の羽ぐき 川原鴨 蛟鴨
田かと鴨 鴨の羽もり 鴨のつき竹

燕歸る　稲負鳥　古文傳文形えてい知りがたし

雁 かり 金 白 厂 海 厂 ひ〜ぐい 桜まごい
アホあ多 結ひても 移え

小鳥 ひこ





いとり多　色鳥 イロドリ　ひよ多 つぐと まーこ まめとり
ひゝき むく多 山ぐい ひぐい

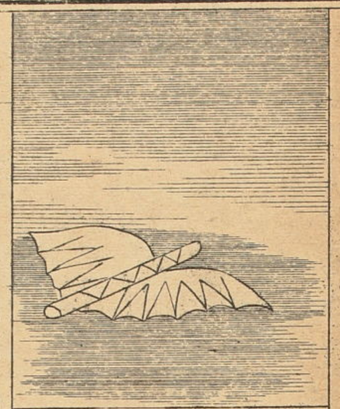
四十々 五十々 小ぐ〜 不ほうろ まんーゆくめーろ 菜いとき
うませ〜 ほうとり こゝとき〜い　　ゆくの小多の名まこ有魚〜

いろきも 移あり　鵙 モズ もゝの草くき　小鷹 タカ 小雲指 この里悦裁　鶉 ウヅラ こう うつらとる あり

雀打 ほう〜ろ まいとう　河原 カジカ 虫え　鰍 カジカ 魚え　はび鮎　蓼鮎 ヤナ 釣 簗

岐簗

鹿 シカ うせき 小男 原 原ふえ　紅葉多 原の美名え　初鮭 サケ　江鮭 エノウラ



鮒 スキ 小鰐 イワシ より 鰯　鰹 カツオ　田を守 田色つく 田を苅

稻葉 イナバ　蓼穂 オチホ 穂 八束穂 稔丹　稻刈 ろ 毛 八穂ものこ 二白去

十二夜 本紀 十三夜の月を黄多清 月ゆ
書けるものの月ゆるをもゝめとす

晩秋

十月 長月 もゝ月 雨白 雨白 季秋 季秋 律すり

御灯 ろる 三月のゝく北斗ゝ灯を とてまろるゝ多ゝ

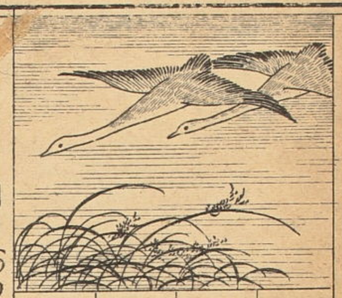
ほうろめ酒

不堪田ノ奏 フカンデンソウ 七日 諸正田 七〜〜ゝ 而くを 縁〜てまきハ
ゝまきゝつき 租税を免〜移ゝ多ゝ

初少袖

桂宮相撲 台

宝涌寺舎利會 セン エ 豆疫鬼の盗〜を韋駄天の
元ゝ〜〜ゝ〜〜ゝ〜〜といふ



醍醐祭 九日 能あり　祇香宮祭 九月 みこ有　鞍馬祭 九日

貴布祢祭 同 生玉祭 同 大坂　伊勢参 十一日 いせ大神宮へ山参をすゝせ給ふなり

白河の祭　天王寺一祭舎 十五日　岩倉祭 十五日

小倉祭 同 九月　勅聖会 三月こおり　栗田口祭 十五日

一宮祭 同日 河内　度会新嘗会 十六日　岡崎祭 同 東山　山口祭 中巳午 周防

呉服祭 十八日 ちやも祭ハ 十七日　蛭利女祭 廿日 高辻室町の西にアリ　旅夷祭 同 建仁寺門前に有 漁人舟中凡彼ノ者ん

形きを いのる　八幡花の頭 廿七 化粧アリ 岩城 廿日　城南寺祭 同日 上京羽咋 同に有　太秦祭 十二日 牛祭と云

定祭 廿二　天満繍法馬 廿五 大坂　木幡祭 廿日　鹿島祭 廿日　逆髪祭

同日　北山祭 廿六日　福王神祭 廿八　鳴滝祭 同　津村祭 廿七 法花

野の宮の祓 源氏榊さき高安嵯峨の神宮よりおもしろしまつる六条御息所も高安にそひておもしろしけれ 光源氏の君まうでゝ後りのり七てむうりと思ふこゝろ　桂川の水被も村人これも同ものたゝ

その十六日之高安の内　桂宮の相撲をたしめ是らの祭祀に三条殿暦九月之さきと物語り給世ぬ是ハ晩

禊しなひしるゝ　秋加十月の頃と又明日はさくい祭日もとゝもれに有しくいその宮その社同と付てゆ

実を遥拝して　改更し　寒露節 今ハ十月廿六　霜降と形る自今　雁 みゝをを張ひても在る者

しても 秋十月之

浅る菊 十日菊　もみぢ衣　紅葉　財獣を祭る自今 ちゝちゝ木形を踏でも 秋へ色うるといひても

名木散る 落葉を踏でも 枯て也 秋之　柞　檀 まさきのかつら 山本のかつら　楓 色うへぬ松　ぬるその宮祭

柿(カキ)紅葉　いてう 銀杏　木の實　榎(エノキ)の実(ミ)　栗(クリ)　栗(クリ)くり　さゝ栗　椎(シイ)　推柴城川百首　推柴いみの題

出せり白柿よりあまし　柿　木練　少あま柿　甘市柿つき　熟柿　蜀(シンブ)漬　黄(クワウ)蜜柑(ミカン)　金柑　久年母(クヂン)

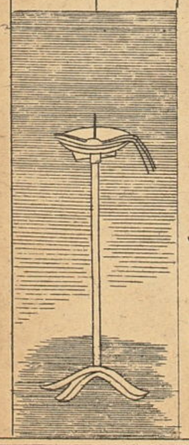
柚(ユ)　柚へ〜　柚みそ　雲州橘(キツ)　佛手柑(ブシユカン)　まるめろ　極(カヤ)　果蓏(クワラン)の実　拓榴(ザクロ)

多子サクロ　榛(ハシバミ)　櫟(トチ)　とちのミ　とち餅(イチヰ)　胡桃(クルミ)　ひよん　團栗(ドンクリ)　梨(ナシ)　生の浦梨　彩の妻梨　こぶなし　ちりのゝ

生の浦ハいせの玉　松子(チヽリ)　椋(ムク)のゝ　さいゝち　木きこ　ゝろ木

さゝの實　南天の実　梅もどき

畔山の色　畔山綿　うゝ枯　草むものそと色付て枯るをいふ



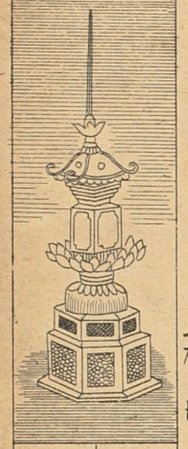
仙蓼(センレウ)　草枯よ花ゆるとゝ以へい秋之　えやこ草　竜膽(リンダウ)とゝり　薄(スヽキ)ちる

思ひ草　ふんゝゝ尾ゝゝもとの思ひ草ハふんゝゝと定家の説　ゴ月草　とろゝ草

紙すきふ　用ゆる草之　老母草(オモト)　苑豆(エンドウ)　まめひく　赤豆ひく　黒豆

茸狩(タケガリ)　蕈(クサビラ)　松茸　椎茸　卜治　いくち　嵐こけ　雲まこけ　天狗こけ　松露(セウロ)　遅稲(ワセ)子　晩田　ひつち田

新米　そと〜米　新酒　古酒　ぶだう酒　紅葉の土器(カハラケ)　もこち　鮒(フナ)



尾越(ゴシ)の鴨　網代(アシロ)打　霜(ツユ)付(シグレ)　霜(シモ)　雲ゝ　霜ゝ　朋ゝき　夜ゝ

秋寒　うそ寒　そぞろ寒　冷〻　霜　ふる鹿　紅葉　錦一重錦

錦の寒氣　衾衣　露を結ひても　秋　秋深き　冬近き　冬を待

長き夜　妹より後　之夜の妹　行秋　枯ちる

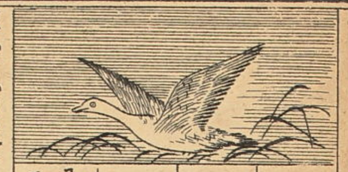
住吉神送　世日　もみちつ菊

初冬

十一月　霜月　神樂月　時雨月　小春　初冬　陽月　惡月

神嘗　神送　一日　神迎　二日　時雨の業　時雨降る事をとめへと　初冬の新米出て日きを祭る

曆奏　一日　七日中勢省より　きるること　ことよさ奏　初霜　紅葉　紅葉の班幣　十日



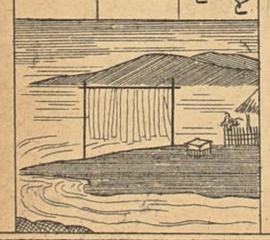
靖國祭　六日　淡山祭　大和玉　十七日　霊魂祭　廿一日　昔八中寅日ナルヨシ

新嘗祭　サテこれも昔八中申日ナリ　相嘗祭　上申　平壁祭　春日祭　月

宗像祭　筑紫の胎形ノ社ニ　當麻祭　上申日　五節　中辰日　帳基試　五節の舞ヲ五人ニ奉寧度

まて天子ハ辰ノ日直衣指貫をめして中殿をめさる天子ハ直衣よさしぬきをめすなり式時の御いあり

殿上の淵酔　寅日　胡飲々中ノ形とうこひて三献まて、礼舞アリ



修者ハ常をもきて初の陣をめぐり天皇の所と向ふと云く

とよのあかり　童女出現　神日　清涼殿にめして、五節と中ハ淨見原ニ皇出現　実ハ海ノ〻時天女のまこうて

琴の曲を惑して五交神をうへして舞うふ日ふ皇五

節の始ありとうや年中行事ハ見元年ノ

狩の使　昔ハ五節の所ハ踏〻〻んあハ交歩の維形とを

めぐり天皇の所と向ふと云く

日吉臨時の祭　中申日

加茂除目の祭 下旬日　東三條御神楽 下弦日　里神楽

小忌衣 をこの袖 山吹の神　日蔭の糸 ひかけのうつし　をこ衣い新嘗会あと神事の時人に着する装束之

ひかけの糸うつぶれとも同しはらくるこ　神楽歌 神遊びのうた　阿知女 庭燎 神楽の曲ノ名あり

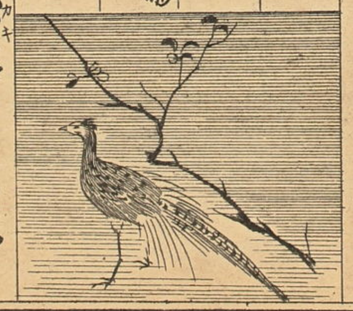
採物ノ歌 榊うたふ　かゝ神うたふ　大荒張 宮人本縁四人あまたらさいもり

小忌法 こも枕さあみ 紙角 大宮きりゝ　多米 田十青　星 ちり立湯立

こまらハまれらさひとものあり

御火焼 神楽の夜さゝ　ふんえんありとう　子祭 ネマツリ　子竹心 吹革祭 八日　夷講 廿日

射玉津島社不角き 五条の南烏丸の西にあり　宣也忌 十三　大師講 天台智者大師の忌日之



鉢角き　法佛事 廿一より廿八日迄祝書上の忌之 世俗ゝ法講と云り　髪置 三歳の男女 中酉日 伊豆国

宇嘉祭 三十日　道祖神祭　霜　初氷

蔥根掘 小雪節 十一月中之　猟開 小猟きる 囲炉裏 炉ゝ ゝ桶 怪火

菜ノ口切　初時雨 時雨 村〳〵れ 泪の時雨 神の〳〵ま　川音時雨 松風の時雨

霜ゝ〳〵ら　木かゝ〳〵　落葉　木の葉 朽葉

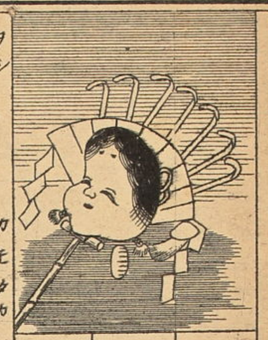
紅葉ちる もゝこぢ散てりのを 深るといひてもあり　木枯 枯壁〳〵壁 枯壁の露　榊枯る 落枯る

葉枯る すへくの草木枯るゝとせい 白かゝ木より口まもあり　枇杷の花 山茶花 椿り花

冬牡丹　八重の花　石蕗花　菫菜　蕪引

大根引　麦蒔　泡る月さゆる　寒　水魚　網代

河ろ木　河ろ市　ひをの使　大和物語ニアリ　千鳥　うきね鳥

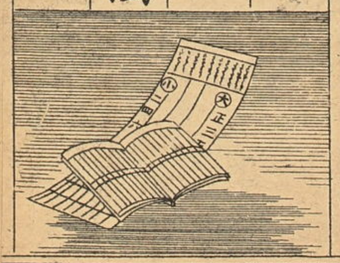


鴛鴦　鴨鳧　夜具曳　鴨　河ぢのむら鳥　生海苔

鶴　榻　岑竈　岑　獣岑　羊羹といふことの獣の形なる岑をてをのゝ先しかるべし

綿　こうもり　綿打　ものとり　延綿　きりもち　衾　古手ま　紙ふすま　紙子　蒲團

頭巾　襟巻　冬竈　冬擂へ　雪垣　雪竿



中冬

十二月　黄鐘　大雪　冬至　仲冬　月正志ます

乙子の朔日　乙子餅　廿一日ゝ一年中の一日の終ゝ　紙ニ渭乙子朔日ト和語ニ季子ヲ称乙子ト初子ヲ字太郎子ト加一月ヲ回ニ左彫月一宋末ノ月ヲ乙子月といふ朔日又准ニ乙子の餅を制祝ヲ一年の号ゝあゝ朔日をゝそく来りしを祝ナリ

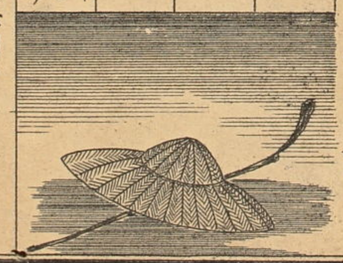
大神祭　二月　梅吟社のまつり

天智天皇御國忌　十月　音柴福寺ニ行ハル朱烏二年ヨリ毎年しまる仏像つくせ殺ひて

拐　将棋の雑　ぬき立ゝ　初雪　初雪物　ほゝ初雪　もゝ　おかあゝ　初雪の雪とい雑の雪ゝ　雪さけび　雪を去ゝふ　をゝへ雪　燠　雪のとち芽　ちゝゝ芽

雪匹　旦雪物

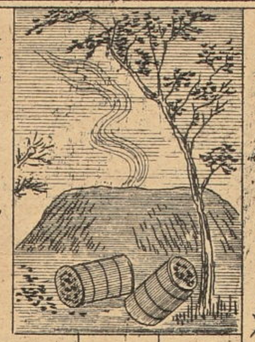
餘寒　より餘　初鄙　鄙　石花　ひゞ　ひゝ雪



近江国志賀の郡大津の宮ホまし〳〵き中臾の主ましておもて〳〵後世に依て西京ハ
何ホもさくひ何〳〵さまれとも是ハ志くらもゝぬるとも成おきされとそいあり　温糟粥　臘八粥を
秋雪成道ノ日也　名温糟粥

月次祭

十一日　神　乞食　十日ろ也も六月ニ同〳〵　仏佛名　十四日　くふまり廿日より三ケ日　仁寿殿の
山本雪をうつ〳〵法性の内にうけて三世の諸仏の名号を唱へ六根の罪を滅せるるなり　かつけ綿　仏名ノ
孝佛ま賜ふ　栢梨の勅盃　律の五ゝやあ〳〵の法のゝきを書りて殿ゝて勅盃なり是も佛名の時ゝ
御髮上　蔵人佐〳〵の名をくるを指りて　冬至　明治の末年ゝ十月廿二日ト宮ル
主殿寮ホ出ひてやくるゝ



一陽来復　寒弾を流　晋魏の世の比宮中ニ於の糸弾をとて日ゝけをたかるよ冬
玉燭後より日ことホ去さ一線を流ると宋時代ニアリ

冬至梅　履を献る　襪を負てまろる　もろこ〳〵まゝ冬の日人の娘さるもの履
襪を勇姑ことそまろもり冬至を践の義ゝとそ

赤豆粥　共工氏ノ子ある玉こう せ〳〵ゝ疫鬼となりて赤小豆をおそ
れホ冬至こけるアリ　ハとて赤小豆の飯を用ゐるアリ　苟菊の使の定　苟菊の使とハ十歳とて古き者居
年の終ホ帯帛をまらせ祭ふるゝ　大神宮の後立春の前吉日　ふとの〳〵ぎ及八墓とて於下の墓へ
と云ふとは世ど年末の事鄭を主と云事ハ志さすホ出す　晋孫の改

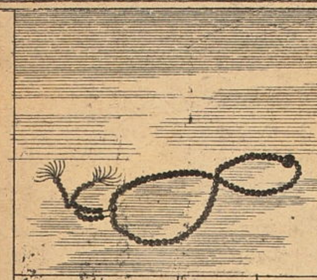
内侍所の御弾　乐　天子内侍ホ行幸ある也　寂勝ちの灌頂　十善松の尾の傍ニ有　大徳ち開山忌
大陰ホ師舎人遠武ノ　松市川の神事　晦日の夜丑の刻ニ神宮ホのりてめを
年十二月廿二日　かるゝこゝさて元日神ホ備へ作り　齋宮繪馬
晦日の祝い世外宮の樹下道の傍ニ小祠アリ里人孫ゝを乞くるゝ
とゝや天王ちの石公法師能聖より為さホ世樹下ニ

耶蘇祭 北吾古宋より伝踏といふものを妻子などに
堂されとそをもふきて今見を加ふ

凍 氷 うちふひ 夏氷陸氷 雪 雪皆 雪車

棲 初冬雪 雪 雪の色 六の花 まさき雪 雪やけ
ふるひふ雪 とひふ雪 雪おろし 雪おろしを

雪仏 雪女 吹雪 はつゆき ふきまき 初雪 霰 霙 こゆる



氷 蚕氷 根氷 吉田大祓 紀多田館多度ト郡家於吉田富場内神一修法被云々十四日式三同

厄塚立 節分ノ夜吉田大祓及芝ものい節分ノ修行あきと迎る年の幸を
節分ノ夜おも 行なあれば出もすれ加へて宋市ノ題とす

厄掛 厄荷 厄掛厄荷ある どい一年世ス

事始 公事はじめ 百姓十三日 世祝十二月 ハロを云社供者とふるアリ

竈祓 給ようける舟を枕の下 ふ為て疫るあり

麦も麦も ちちすん

衣配 一月の料ふ衣をつくられる之 節季ふれ うだふ 煤掛 ちちまき
源氏五ちふ衣の色もあり

竈掛 札をさめ 豆ち 搗 もち花 年木樵 星佛貴 鉦打麦
日ふ板麦 ゆつりた麦 ちさんり ちさりより 年わすれ 古暦 唐の末 老果ろ唐
ちぢりはりりさり叶麦

年ごもり 早梅 お岐梅 探梅 臘梅 早咲梅 冬梅

孟宗竹 冬筍アリ 孟仙 とろの市 五條天神参

勝の餅 世淀宮参 白白木ハ風気をさる薬あるゆへ
白木 夜赤ふくあるとしまちの餅を久へ梅ふ粥といふ習之 大原雑喉藤

山城国葵宮郡大原村アリ 葵土神乃榊屋と参篭して通夜をするあり
叶祝男女いとせのかさちひをするといつり

岡見（チカミ） 大つごもりの夜 ものきよまるのあり又 蓑をさゝさまふきて
もるやは我あをそ見ぬいかくる年の古山ゐ也と之 堀川百首 歌アリ

終集魂祭（オツトシノタマツリ） 初盆に迎まるとしの終まは先祖
又やはらんとさふん首根好な

門松いとあみとろる 除夜（ショヤ） 大晦日

いぬるとし 年孫（ヌハリ） 年（トシ）浪（ナミ）の活るく

年の坂 としの湊（ミナト） 歳暮 年の際（キハ）

年の名残（ナゴリ） 年の果（ハテ） とし みつ とし の尾

明治廿六年一月廿五日印刷
仝 年二月 五日出版

編輯者 南葛飾郡小梅村六十四番地 晋
翻刻印刷兼發行者 京橋區南八丁堀二丁目四番地 永澤三郎
專賣人 日本橋區堺町八番地 東生鐵五郎

特別大賣捌所

大川屋錠吉 長島支店
目黒支店 金櫻堂書店
辻岡文助 山口屋書店
上田屋書店 小林喜右衛門
水野慶次郎 榊原友吉

柏屋書店 大倉書店
杉本七百丸 小林新兵衛
袋屋書店